

# 埋蔵文化財発掘調査概報集

— 1998年度 —

1999

財団法人 東大阪市文化財協会

## 本文目次

1 鬼塚遺跡第12次発掘調査概報	
I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	1
III. 調査結果	3
IV. まとめ	8
図版	9~12
2 若江遺跡第1次発掘調査概報	
I. 調査地点と調査の経過	13
II. 調査の概要	14
1. 層序	14
2. 造構	16
3. 出土遺物	19
III. まとめ	27
図版	29~56
3 西堤遺跡第4次発掘調査概報	
I. 調査に至る経過	57
II. 位置と環境	58
III. 調査概要	60
IV. まとめ	66
図版	67~69

## 鬼塚遺跡第12次発掘調査概報

### I. 調査に至る経過

東大阪市のすすめる学校便所水洗化工事計画に基づいて、市立枚岡中学校及び枚岡幼稚園の浄化槽建設を平成元年度に実施しようとする計画が教育委員会施設課より文化財課へ提出された。文化財課では、工事予定地が周知の鬼塚遺跡内に位置することから、文化財保護法に基づく届出書の提出をもとめるとともに、工事予定地にて遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査を実施することとした。この調査により、枚岡中学校の浄化槽建設予定地において、地表下約0.6m以下に厚さ約1.2mで古墳時代前期の土器多数を含む地層を検出したために、工事主体者である施設課に対して工事予定地の発掘調査が必要であることを申し入れ、財団法人東大阪市文化財協会による委託事業として平成2年4月に調査を実施することになった。

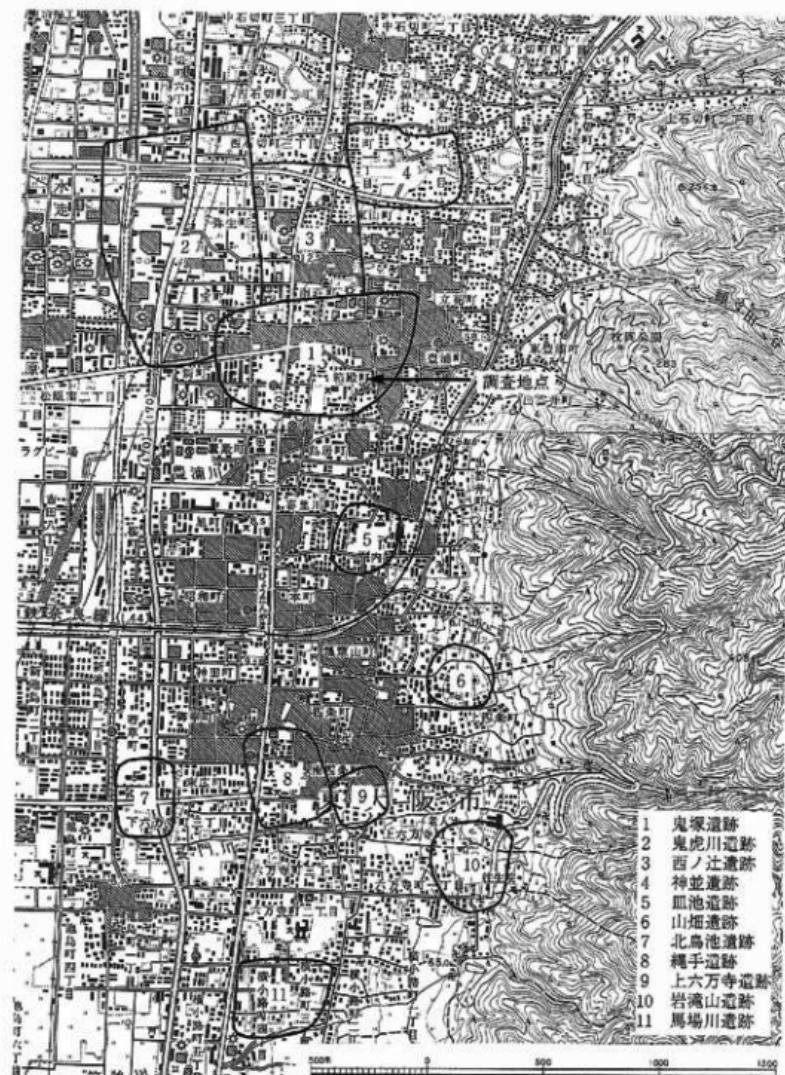
### II. 位置と環境

鬼塚遺跡は生駒山の西麓、東大阪市箱崎町・新町・南莊町にまたがって所在する。遺跡の立地する地形は、生駒山より流れ出る豊浦川によって形成された扇状地で標高は約10~30mを測る。この扇状地は標高20m付近で南北に幅400mほどの規模で、南は豊浦川、北は現在では埋積されているが近鉄額田駅付近より西へむかう谷筋でおわる。この北側の谷筋では、昭和63年に行なわれた発掘調査(第11次調査)により5世紀頃の小区画をもつ谷水田が検出されている。

鬼塚遺跡は縄文時代後期~奈良・平安時代の集落跡であるが、縄文~弥生時代には尾根筋とされる扇状地の中央部分に集落が形成されており、古墳時代以後に谷の埋積がすすむにつれて南と北に集落は拡大したと推定される。鬼塚遺跡の周辺の遺跡としては、北約0.9kmに縄文時代前期~中世の複合遺跡である西ノ辻遺跡が存在する。この遺跡は西隣にある鬼虎川遺跡とともに弥生時代中期に栄え、後期には集落の中心が東へ移動して東隣の神並遺跡とともに大集落が営まれた。中期から後期にまたがって存続する西ノ辻遺跡より出土する土器は、生駒西麓地域の地城色や土器様式の変遷を示す標準としてその名が知られている。

いっぽう、北約0.7kmには弥生時代後期~平安時代の集落跡である皿池遺跡があり、弥生後期後半の竪穴住居跡が1棟検出されている。この住居跡は鬼塚遺跡E地点で検出された焼失住居跡とともに生駒西麓では数少ない竪穴住居跡の一つである。南約0.8kmには四天王寺式伽藍配置をもつことが発掘調査により知られた河内寺跡があり、その周辺は河内郡郡衙の推定地とされている。南約1.6kmには繩手遺跡、約2.2kmには馬場川遺跡が縄文時代中期~古墳時代に存在し、とりわけ縄文時代のこの2遺跡は近畿地方有数の集落跡として知られている。

西ノ辻・鬼塚・皿池・繩手・馬場川の各遺跡は出土遺物の多さより集落の盛行が推定できる時代は弥生時代後期であって、生駒西麓という狭い範囲で地域的まとまりを有していた。この時代の集落の一つである鬼塚遺跡の中心部の一帯に今回の調査地は位置する。



第1図 鬼塚遺跡位置図 (1/25,000)

### III. 調査結果

発掘調査は、平成2年4月9日より枚岡中学校内の浄化槽予定地（約40m<sup>2</sup>）において開始し、4月18日から枚岡幼稚園内の予定地（約20m<sup>2</sup>）の調査を併行し、4月23日まで実施した。調査は機械により盛土及び旧耕土を排除した後、地層ごとに人力掘削と精査を行なった。こうした作業によって明らかになった地層及び遺構・遺物等の状況は、前記2ヶ所の調査地点で大きな違いが認められた。

#### 1 第1地点（枚岡中学校浄化槽予定地）

##### 地層

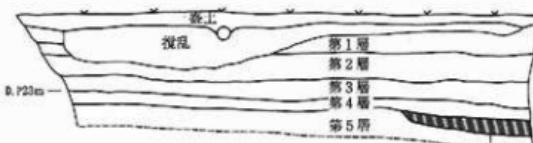
現在の地表は中学校用地造成時の盛土によりほぼ水平で、標高は0P.約24mを測る。厚さ約60cmの盛土の下に第1層～第5層の堆積層があり、各層は北から南へ緩やかに下降する。出土遺物により判断される各層の堆積した時代は、第1層が中世以降、第2層が古墳時代後期～平安時代、第3層が古墳時代前期（庄内式～布留式の時代）、第4層が弥生時代後期（畿内第V様式の時代）と考えられる。第5層は、本地点では遺物未検出であったが、周辺で行なわれたこれまでの調査において検出された縄文時代晚期の遺物を含む地層と層相が酷似する。各層の特徴は以下のとおり。

盛 土：2回にわたって整地のために運び入れた山土主体のもの。合わせて厚さ約60cm。

第1層：にぶい赤褐色5YR5/4壤土。5cm大の礫と瓦器・土師器の細片少數を含む。建物基礎による擾乱箇所も多い。厚さ約30cm。



第1地点位置図（1/800）

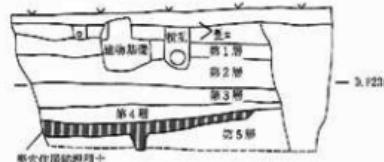


第1地点東壁土層断面図（1/80）

窓穴住居跡埋土



第2地点北壁土層断面図（1/80）



第1地点南壁土層断面図（1/80）

第2図 調査地点の層序（1/80）

第2層：灰褐色7.5YR4/3壤土混じり砂疊層。下部はにぶい黄色2.5Y6/4細粒砂層に、2次堆積による須恵器・土師器片を少数含む。厚さ約40cm。

第3層：褐色7.5YR4/3細疊混じり砂質粘土。畿内第V様式・庄内式・布留式の土器を含む。下面において庄内式の広口壺を棺身とする壺棺墓が1基検出された。層厚は調査地南東部で最も厚く約40cm。北部では薄く10~20cmとなる。

第4層：暗褐色7.5YR3/3砂質粘土。畿内第V様式の土器を多量に含む遺物包含層。下面において竪穴住居跡1棟と柱穴を検出。厚さ20~30cm。

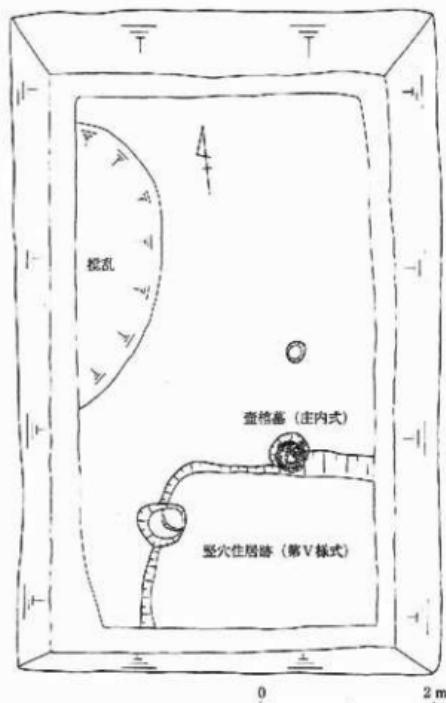
第5層：にぶい黄褐色10YR5/4細疊混じり砂質粘土。遺物は未検出。厚さ60cm以上であることを確認したが、G.L.-2.5m以下は湧水による壁面崩落の危険が大きいために未調査。

#### 遺構

第3層下面の遺構 壺棺墓が1基検出された。庄内式土器を使用し、棺身は広口壺、蓋は

壺を用いたものである。壺のなかに人骨は認められず、また壺胴部に棺への転用を示す焼成後の穿孔もみられないが、直径45cm・深さ30cmの円形ピット内に正立状態で壺を据え、その上に庄内壺を伏せ置いた状態より壺棺墓と判断した。棺身として用いる広口壺は、その形態と製作手法より庄内式の中段階のものと考えられ、蓋として用いる壺もまた同時期に比定できる。注目すべき点は、棺身に用いた広口壺が非河内産で、蓋に用いる壺が生駒西麓産の胎土をもつ事実であって、産地の異なる2個体の土器をセットとして土器棺に転用するという弥生時代中期の土器棺墓に認められる特徴が墓制上の伝統として古墳時代初めまで残ることが伺われる。

第4層下面の遺構 竪穴住居跡の一部と直径30~50cmの柱穴3個が検出された。竪穴住居跡は方形あるいは長方形の平面プランの住居跡



第3図 第1地点の遺構平面図 (1/60)

で、検出部分は全体の約1/4とみられる。検出部分は、北西角より東西3.0m・南北2.3mを測り、竪穴の深さは周壁際で15cm、中央部ではやや深く25cmである。床面は水平ではなく、中央部にむかってやや下降している。調査地南壁断面にこの住居跡の主柱穴の一つとみられる直径27cm・深さ25cmのピットが検出された。周壁の内側に板壁や壁材を支えるための杭跡・溝跡等はみられず、また住居跡の周間に垂木穴も検出されなかつた。この住居跡の時期は、竪穴内より手培形土器を含む第V様式土器が出土し、周壁を切って庄内期の壺棺墓が存在するなどの事実より弥生時代後期末に比定される。

#### 出土遺物

第4層及び竪穴住居内より出土した第V様式土器が多数を占め、第3層出土の第V様式～布留式土器がこれについで多い。第2層と第1層出土の須恵器・土師器・瓦器には2次堆積による磨滅が認められ、出土数も少ない。このほか3点の縄文土器が第4層と竪穴住居跡内より出土し、砥石1点が竪穴住居跡内、鉄錐1点が第3層よりそれぞれ出土した。

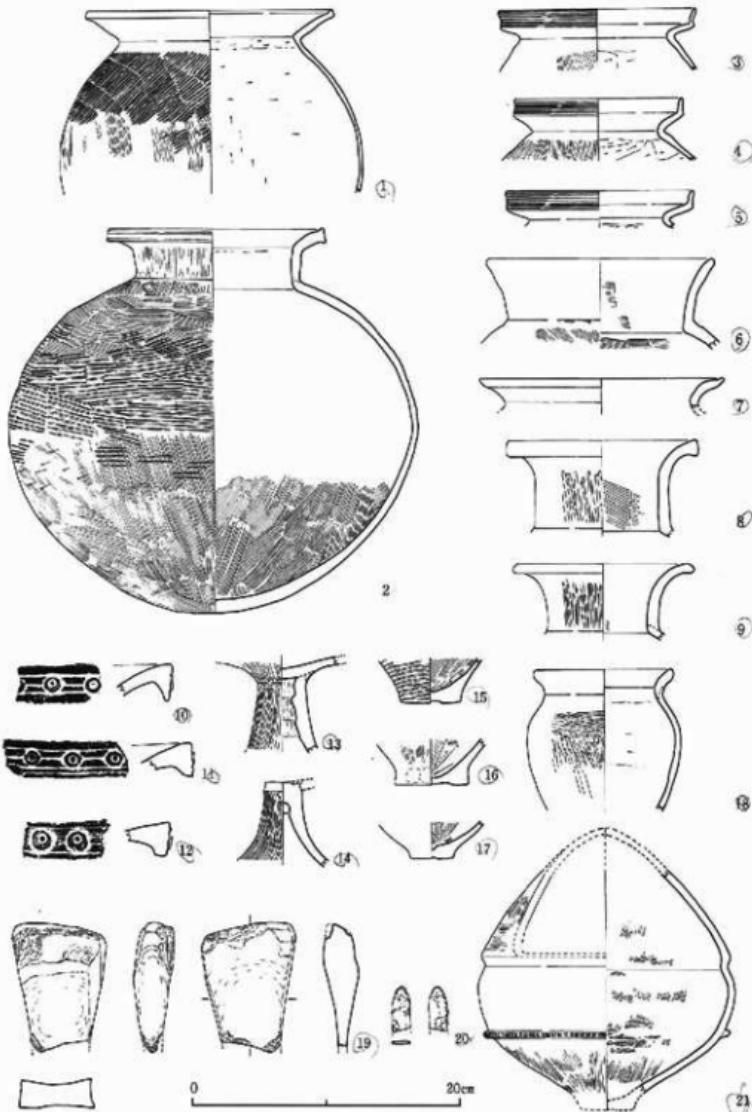
古墳時代前期の土器（第4図1～6） 1は庄内式の壺で、壺棺の蓋として使われていたものである。胴部外面に右上りの細筋タタキメ（5条/cm）を残し、内面をヘラ削りすることによって器壁を薄く仕上げている。口縁部は「く」の字形に外反し、端部はつまみ上げにより上方に肥厚している。胎土は角閃石を多量に含む生駒西麓産である。

2は球形丸底の胴部と短く直立する頸部より外反する口縁部をもつ広口壺。壺棺として転用されていたものである。胴部外面の肩から最大径よりやや下の範囲に水平あるいは左上りのタタキメ（3.5条/cm）を残す。肩部はタタキメの上に横あるいは斜めのハケメを施し、胴下半部は局部的なヘラ削りと縦のハケメを施している。丸底の底部付近には縦のハケメだけが認められる。内面は胴上半部をナデ、下半部を縦のハケメで調整している。これらの調整痕よりみて、この壺の胴下部の成形には型作り技法が用いられ、胴中位以上の成形にはタタキ技法が用いられたと推定される。橙色を呈し、胎土に長石・石英を多く含む非河内産の土器。

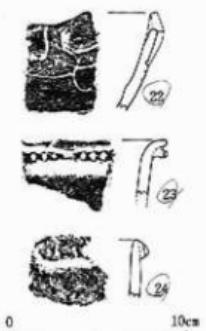
3～5は二重口縁の形状、口縁部外面の櫛描直線文、胴部内面のヘラ削り等の特徴より、瀬戸内地方の古墳時代初頭の土器型式である酒津式に相当すると考えられる。器壁は1の庄内式の壺と同様に薄いが、胎土は角閃石を含まない非生駒西麓産。奥田尚氏による胎土鑑定により、4の胎土は岡山県足守川流域の砂を使用した可能性が指摘されている。6はゆるく外反する直口口縁の壺。肩部外面にハケメ調整を行う。胎土に角閃石・雲母・長石・花崗岩細礫等が混在する特徴より、奥田氏によって旧大和川流域に堆積した砂の使用が指摘された。

弥生時代後期の土器（第4図7～18・21） 7・11・12・14・16・17・21は竪穴住居跡内より出土し、8～10・13・15・18～20は第4層より出土した。胎土は15を除き生駒西麓産。

10～12は広口壺で、口縁端部を下方に拡張した部分に擬凹線を施し、その上に竹管を押捺した円形浮文を貼付けたもの。8・9は無文の広口壺。8は直立する頸部をもつが、9は口縁部と頸部の境が明確でない。



第4図 鬼塚遺跡第12次調査 第1地点出土遺物実測図（1／4）



第5図 繩文土器拓影 (1/3)

7・18は壺で、7は比較的大型、18は小型のもの。共に口縁端部が若干受口状を呈する。18の胴部にはタタキメが認められない。底部15・16は壺、17は壺の底部であろう。

13・14は高杯脚柱部。14の脚柱上面にはヘラミガキが認められ、脚柱上縁には杯部粘土の剥離痕が認められる。これらの特徴は、製作技法において脚部だけを先に多数成形・調整し、半乾燥した後に杯部を成形するという生産方法が行われたことを示すものである。壺にみられる分割成形技法とともに弥生時代後期の土器作りが省力化・大量生産の方向に変化したことを見せる資料となるものである。

21は手焙形土器で、底部及び覆い部分の大半を欠く。残存部分

より推定できる全体の形は、平底の底部をもち、腰部に刻目凸帯を貼付け、山形の覆い部をもつものとなる。調整は、凸帯以下の外側に目の細い綿のハケメ、その他の内外面は目の細かい綿のハケメによる。橙色を呈し、胎土には角閃石の微粒を含むが、その含有量は他の土器に比較して少ないことから、生駒西麓のなかでも花崗岩帯を母岩とする地域で製作されたものと考えられる。

砥石 (第4図19) 砂岩製の砥石。長さ10.6cm・幅7.0cm・厚さ2.8cmを測る直方体の砥石で一端は折損している。両端面を除く四面はすべて使用により凹面を呈する。砥石の素材にきめ細かな砂岩を用いた仕上げ砥石であって、共伴遺物より弥生時代後期のものとみられる。おそらく鉄製利器のための砥石と考えられる。竪穴住居跡内出土。

鉄器 (第4図20) 扁平の細長い鉄片で一端は尖る。他の一端は折損するために全形は不明であるが、おそらく鉄鎌の先端部分であろう。表面及び内部は錆が進行し、鉄素材はほとんど残されていない。第3層出土。共伴遺物からは弥生時代後期～古墳時代前期のものとみられる。

縄文土器 (第5図) 22・24は竪穴住居跡内、23は第4層にいずれも二次的に堆積したものである。22は浅鉢の口縁部。口縁下の体部に磨消縄文を施す縄文時代後期初めのもの。施文は地文として施した縄文のなかにヘラによって区画線を描いた後、口唇部とヘラ区画との間の器壁を1~2mm削り取り、縄文区画以下に体部についてはナダにより磨消を行っている。口唇部は波状を呈する。体部内面の調整は巻貝を使用。黒褐色を呈し、胎土は生駒西麓産。24は口唇部外面に断面三角形の凸帯を貼付け、その上にヘラによる刻目を施した深鉢で。灰白色を呈し、長石・石英を多量に含む胎土をもつところから非河内産とみられる。23は短く外反する口縁部の直下に刻目凸帯を貼付けた深鉢。凸帯に施された刻目は棒状の工具を押しあてたもの。褐色を呈し、胎土は生駒西麓産。23・24はともに口縁形態より縄文晩期末に比定される。

## 2 第2地点 (枚岡幼稚園浄化槽予定地)

第1地点の南約140mに位置し、現地の標高は第1地点よりも約3m低いO.P. 約21mを測る。

地層は、厚さ約1mの盛土の下に旧耕作土、床土、客土と続く。その下の第3層は奈良～平安時代の土器を少数含むが、調査地西半部では棚田造成時に削り取られて残されていない。第4層は中粒砂・シルト混じり細粒砂層に粘土層がブロック状に混じる。古墳時代の土師器細片が僅かに出土した。第5層は無遺物層である。

遺構・遺物は、調査地の東壁断面においてピット1個が検出されたほかに認められなかった。ピットは第3層下面より掘られた直径60cm・深さ24cmを測るものである。第3層出土物より、このピットの時期は奈良～平安時代と考えられるが、その性格については不明である。

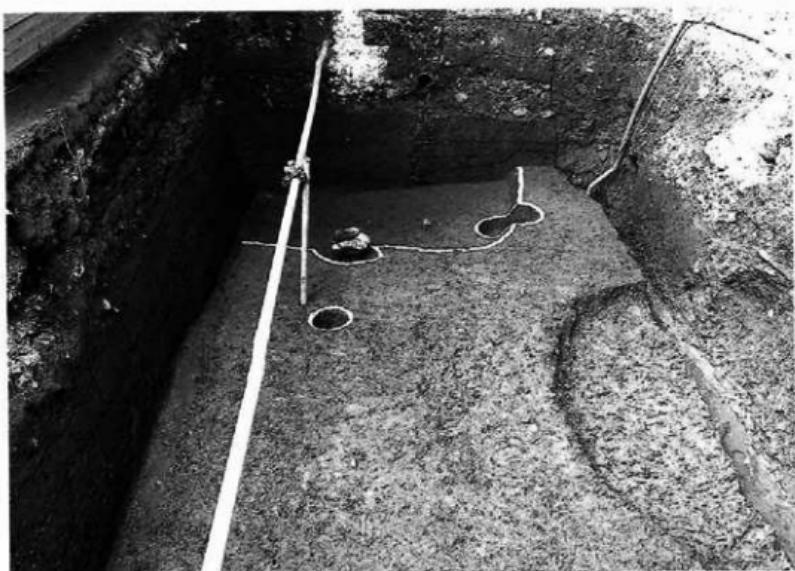
#### IV.まとめ

1 第1地点の第3層下面において、庄内式の広口壺を用いた壺棺墓が検出された。この壺の上に庄内壺が合せ口の状態で置かれている。壺の大きさから、おそらく小児墓であろう。河内地方の壺棺墓としては弥生時代中期のものが瓜生堂・西ノ辻・鬼虎川等の遺跡で多数検出されているが、弥生時代後期～古墳時代前期のものとしては縄手遺跡で1例、鬼塚遺跡で2例の合計3例が知られる程度である。縄手遺跡の例は二重口縁の壺を頸部にて打欠いて、肩部を棺身、口頸部を反転させて蓋とする。口縁部外面に波状文と円形浮文を施すこの壺は、今回検出した広口壺よりも若干古相を呈するものである。いっぽう、鬼塚遺跡の2例は1968年に行われたC地点の調査で検出されたものであって、小平底をもち口縁端部を下方に拡張して擬凹線数条と円形浮文を貼付ける特徴から、今回のものより明らかに古い弥生時代後期末に属するものである。今回の例は煮沸効果にすぐれた庄内壺を土器棺の蓋に用いた珍しい例である。

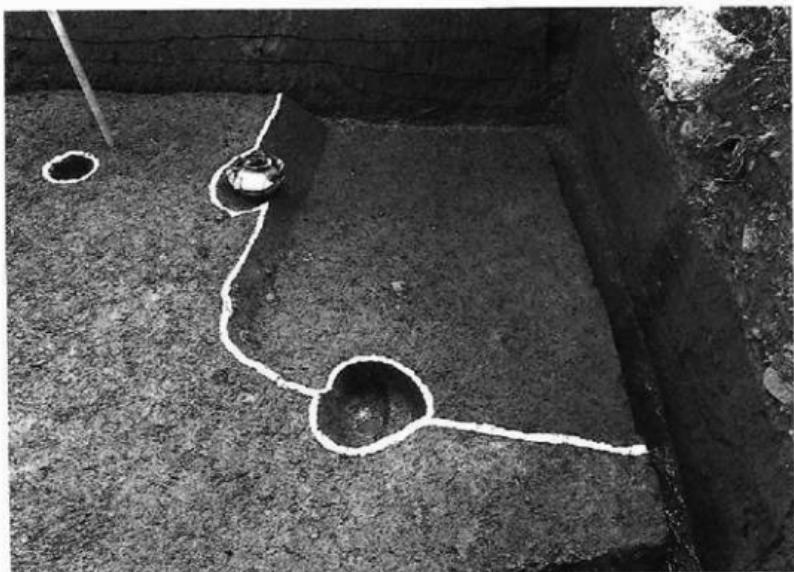
2 第1地点の第4層下面において、弥生時代後期後半の方形あるいは長方形プランの竪穴住居跡が1棟検出された。鬼塚遺跡ではE地点で検出された焼失竪穴住居跡に続く2例目となるものである。生駒西麓の東大阪市域においてこれまで検出された竪穴住居跡としては、縄手遺跡で縄文時代後期、山畠遺跡で弥生時代中期末、岩滝山遺跡で弥生時代後期前半、前記した鬼塚遺跡で弥生時代後期中頃、皿池遺跡で弥生時代後期後半、植附遺跡と馬場遺跡で古墳時代中期等のものが知られている。これらの住居跡の平面プランは、プラン不明瞭の縄手遺跡例を除くと、山畠・岩滝山遺跡例では円形プランが含まれるが、その他は方形容または長方形プランであり、弥生時代後期に住居プランが変化したことが伺われる。

3 出土遺物では瀬戸内地方の古墳時代初めの土器である酒津式の甕が注目される。出土した3個体のうち少なくとも1個体は岡山県足守川流域の砂を使用していることが胎土分析によつて指摘され、吉備地方から搬入されたものと考えられた。1973年調査の鬼塚遺跡D地点において、東海地方より搬入されたとみられるS字状口縁台付甕が出土した事実と併せて、古墳時代初めの生駒西麓地域と瀬戸内や東海地方など他地域との密接な交流を示すものである。

図版1 鬼塚遺跡第12次調査 遺構



1 第1地点第4層下面の全景（北より）



2 第1地点第4層下面の竪穴住居跡（弥生時代後期・西より）

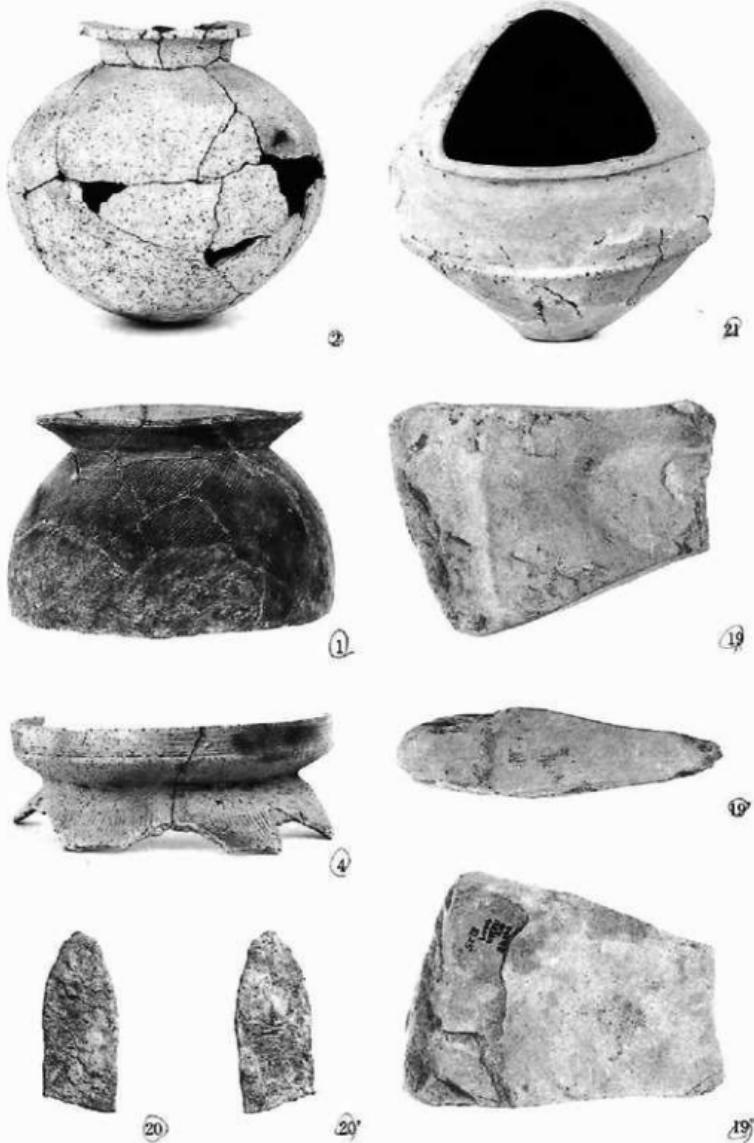


1 第1地点 第3層下面の壺棺墓（庄内期・西より）

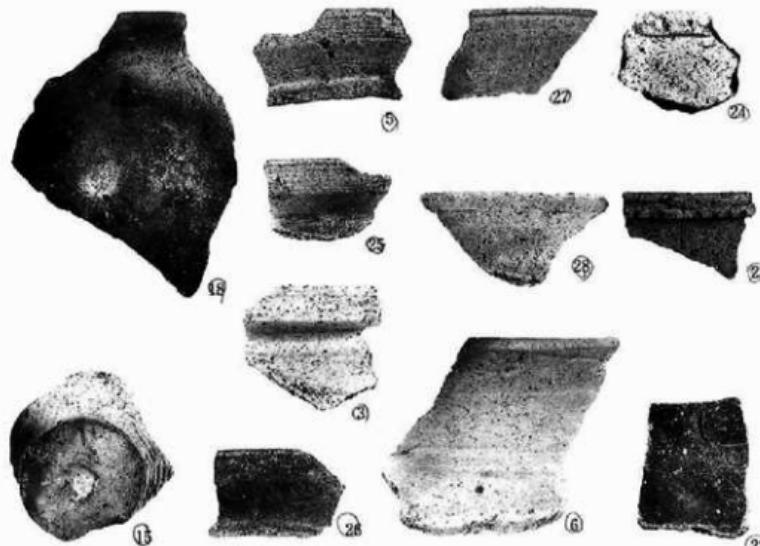


2 第2地点 第4層の下面の全景（西より）

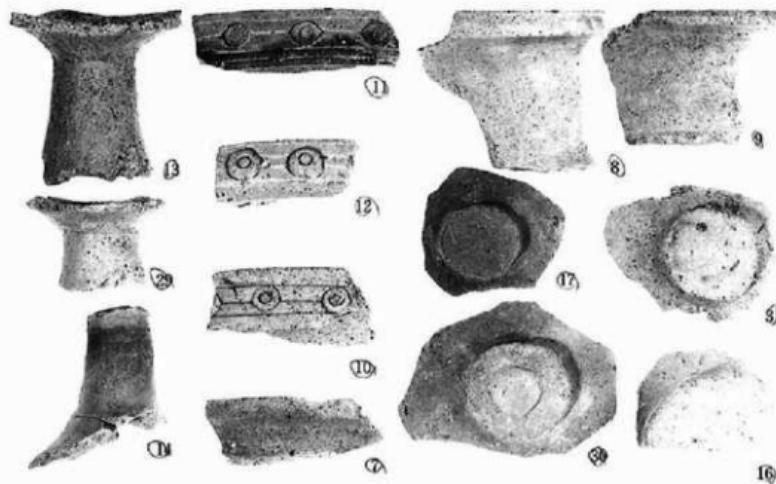
圖版3 鬼塚遺跡第12次調査 第1地点出土遺物



第3層・第4層出土遺物 庄内式土器1・2 酒津式土器4 第V様式土器21 破石19 鉄器20



1 第3層・第4層出土土器 第V様式15・18 庄内式6・26 酒津式3・5・25 布賀式27・28 繩文土器22~24



2 第4層出土第V様式土器 7・11・12・14・16・17・30・31は竪穴住居跡内出土

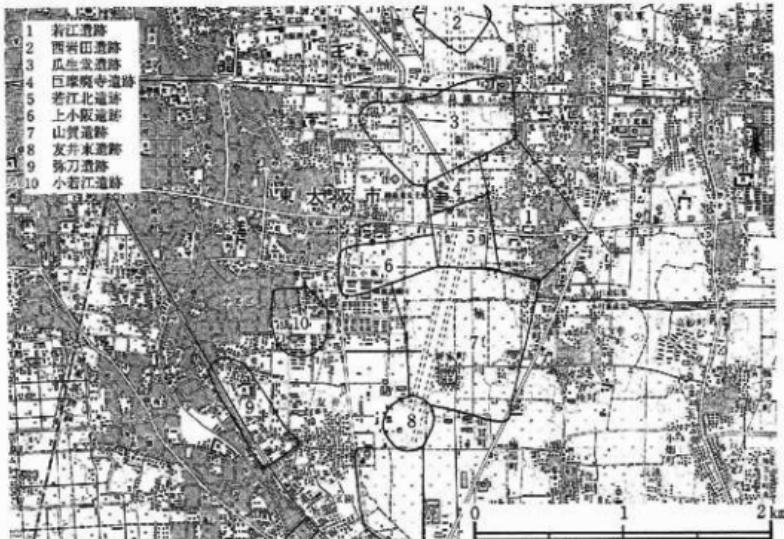
## 若江遺跡第1次発掘調査概報

### I. 調査地点と調査の経過

若江遺跡は、東大阪市若江北町～南町一帯に広がる複合遺跡である。

従来は、若江城跡・若江郡衙跡・若江廃寺跡と別々に遺跡範囲を設定していたが、現在はそれぞれの造構が重複していることが判明しているので、これらの範囲を総称して若江遺跡と呼ぶことにしている。

東大阪市教育委員会は、若江地域の生徒増に対処するため、市立若江小学校校舎増築工事を計画したが、予定地が若江城、若江廃寺の範囲にあたるため、事前の試掘調査を実施することになった。試掘調査は、昭和47年7月10日より7月18日まで実施した。その結果、予定地で造構・遺物が検出された。市教育委員会では、予定地全域の発掘調査が必要であると判断し、本調査を東大阪市遺跡保護調査会へ依頼して実施することになった。本調査は、昭和47年12月1日より昭和48年3月31日まで実施し、以後の遺物整理を財團法人東大阪市文化財協会が引き継いで実施した。発掘調査の結果は、後述するように調査地の西側で若江城の時期の造構を多数検出した。この調査結果を受けて、東大阪市教育委員会文化財課では、検出した造構の取り扱いを大阪府教育委員会の指導のもと施設課と協議をおこなった。その結果、当初の校舎建築予定地を東側だけとし、3階建てから4階建てに設計変更を行い西側の造構を保存することになった。造構は調査終了後、そのまま埋め戻しがおこなわれ、現在は運動場になっている。



第1図 遺跡位置図

## II. 調査の概要

調査地点は、東大阪市立若江小学校敷地の東南コーナーにあたり、「」字形を呈する調査地で、対称面積420m<sup>2</sup>である。今回の調査で検出した遺構は、すべて中世期に属するもので、建物跡1ヶ所、井戸6基、溝、土坑などがある。

調査は、まず調査地を10m方形に区画し、東北より南へ1地区、2地区、3地区と呼び7地区まで地区設定し、遺構の記述、遺物の取り上げなどもこれに従った。

### 1. 層序

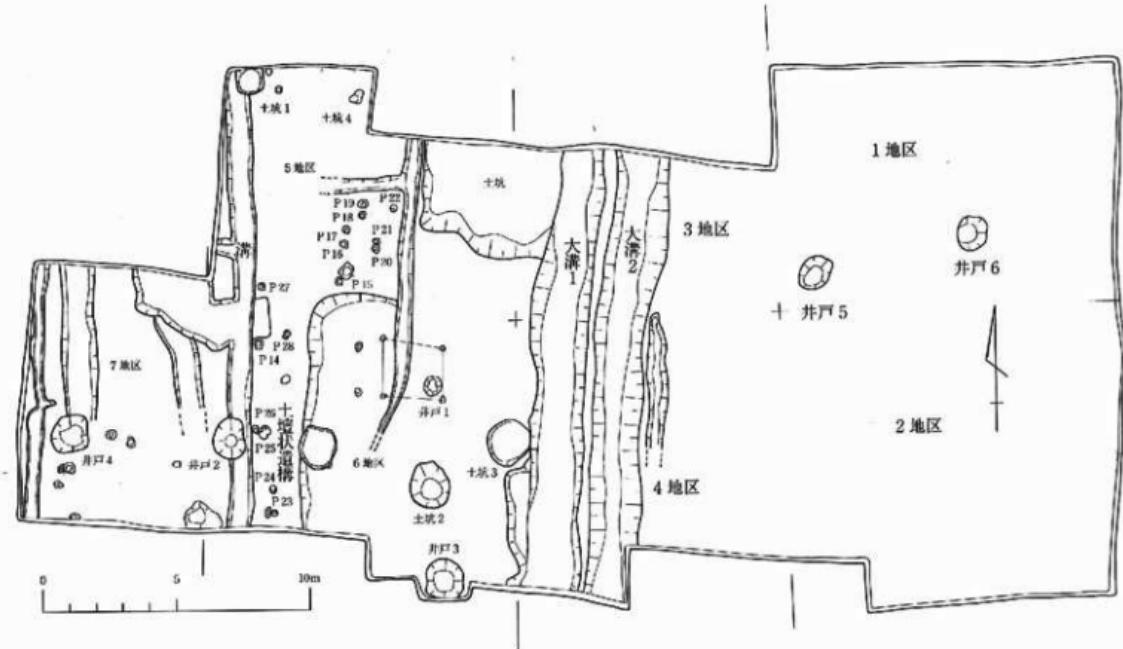
調査地の基本層位は、以下のとおりである。

- 1層 表土。厚さ10cm。
- 2層 盛土。厚さ20cm～30cm。運動場の盛土。
- 3層 旧表土。厚さ10cm。
- 4層 床土。厚さ5cm。
- 5層 茶褐色土。厚さ20～25cm。遺物包含層で弥生時代～中世末までの遺物を含む。
- 6層 黄褐色粘質土。中世期の遺構面。

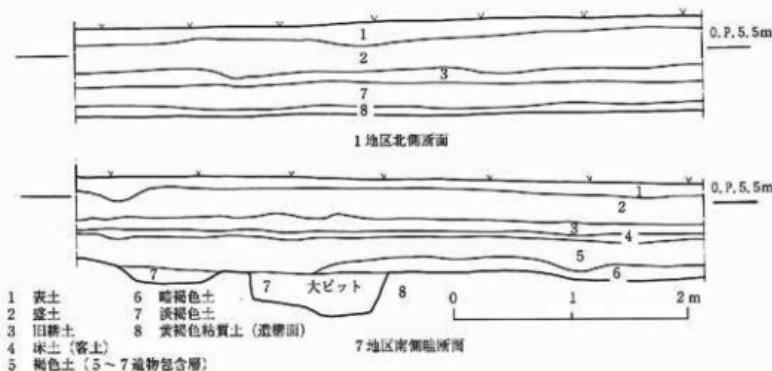
調査地は大きく6層に分層できる。調査地内全域ではほぼ安定した堆積状態を示している。第1・2層は、小学校造成時における盛土であり、3層より以下が旧地形を表している。旧地表面より約40cmで中世期の遺構面に達するが、これは調査地の全域で同様である。第5層が遺物包含層であり、ほぼ全城で良好に認められる。内部より中世期の遺物、奈良時代の遺物が多量に出土し、特に瓦類の出土が顕著である。中世期のベース面は、調査地の西半分で黄褐色の粘質土であり、東側は黄灰色の砂層となっている。黄灰色の砂層は、試掘調査では1m以上の厚さがあり、内部より古墳時代～弥生時代の摩滅の著しい土器が出土した。断面観察の結果から、



第2図 調査地点位置図 (1/25,000)



第3図 道桿配置図



第4図 調査地断面図

調査地周辺は、古墳時代頃には洪水等で運ばれた大量の砂によって厚く覆われていた。その後、若江寺に関する遺構がつくられ、中世期には大規模な整地作業によって若江城に関する遺構がつくられたものと考えられる。

## 2. 遺構

今回の調査地は、420m<sup>2</sup>で、調査地を10m方形に区画し、東北より南へ1地区、2地区と分け7地区まで設定した。今回の調査で検出した遺構は、すべて中世期に属するものである。建物跡(掘立柱建物)・井戸・溝・土坑・壇棺などがある。

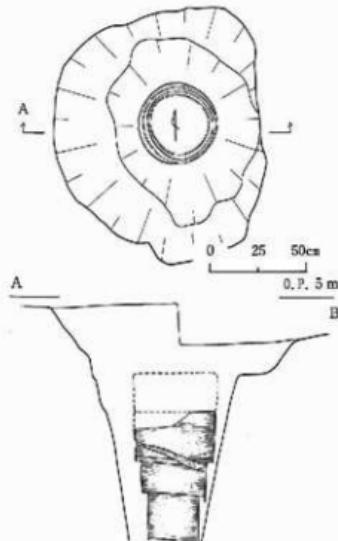
### 土壇状遺構

5地区～6地区にかけて、幅約2mで南北に黄褐色の粘土を約5cm程盛り上げた土壇状の遺構を検出した。土壇上中央には、約30～40cm間隔で方形の掘り方をもつ柱穴を検出している。柵列ないし塀の施設ではないかと思われる。

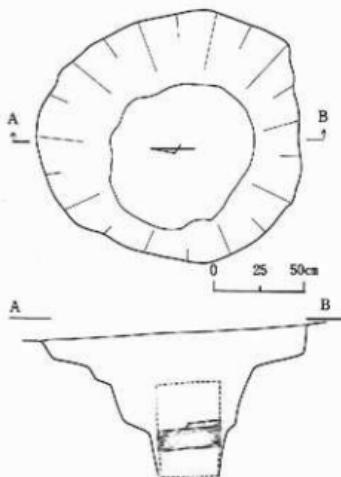
5地区北側で一辺25cm前後の柱穴を10ヶ所検出した。小規模な建物の存在がうかがわれるが、復元はできない。

### 井戸1

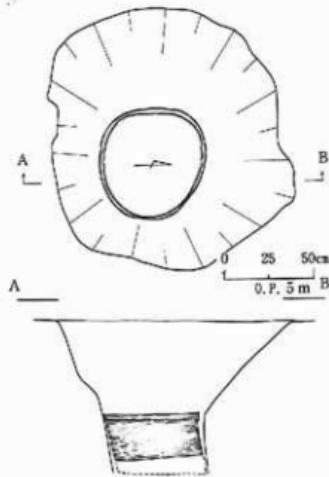
南北3m、東西2m、深さ5～10cmのほぼ長方形形状を呈する凹地の中央に位置する。径50cmの円形の掘り方内に上部を羽釜、下部を曲物で井筒と



第5図 井戸2実測図



第6図 井戸3実測図



第7図 井戸4実測図

し、井戸枠に瓦を使用している。羽釜は、底を打ち欠いたものを5段以上積み重ね、下部は曲物を数段重ねていたと思われる。井戸井筒を中心にして周辺で計4個の礎石を検出した。礎石は、東西2.2m、南北1.9m~2.1m間隔で、いずれも20cm前後の人頭大の自然石を利用している。比較的平坦な面を上に向いている。井戸に伴う覆屋の礎石と考えられる。

#### 井戸2

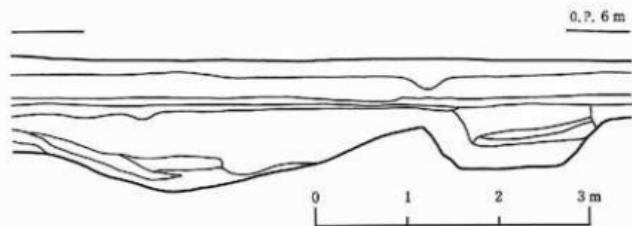
6地区の土壇状遺構の西側溝に切られる形で検出した。南北1.5m、東西1.0mの長楕円形の掘り方中央に、曲物の井筒を検出した。曲物は、3段検出されたが、残存の状況から復元すると4段重ねられていたと思われる。残存状態は良好である。曲物は、上部の残存部で径40cm、高さ25cm、下部で径25cm、高さ25cmを測り、徐々に径を小さくし、深さ1mを測る。

#### 井戸3

6地区で検出した。径1.4m、ほぼ円形の掘り方を呈する。生焼けの平瓦を井筒に転用して使用している。掘り方は、深さ85cm、地表下20cmで2段掘りとなり、地表下55cmのところで曲物井筒を検出した。残存状態は非常に悪く、幅10cm程度を残すのみである。断面観察の結果、径35cmの曲物を少なくとも60cm以上の高さに重ねていたと考えられる。

#### 井戸4

7地区で検出した。1辺1.4mの隅丸方形の掘り方を呈し、深さ80cmを測る。内部より平瓦が出土している。2段の曲物を検出した。上部は、わずかに残存するのみである。下部は、径50cm、高さ20cmで曲物は斜めに据え付けられていた。



第8図 大溝1・2断面図

### 井戸5

1~2地区で検出した。サブトレンチにより南半分を削平されている。復元の掘り方は、1.2m~1.0mの長楕円形と考えられる。井筒は、径30cm前後の曲物と考えられるが詳細は不明である。

### 井戸6

径1.2m、深さ60cmのはば円形の掘り方で、2段掘りを呈している。井筒は、径30cm前後の曲物と思われる。

### 大溝

3地区、4地区にかけて、南北に延長16.5mを検出した。大溝は中央に畦を残し、2条を平行して検出した。西側の溝は、幅1.9m、深さ30cm~50cmで北から南へ徐々に深くなる。東側の溝は、幅2.1m、深さ約1.5mを測り、溝底はゆるやかに北から南へ傾斜している。溝中央の畦は上幅0.5m、下幅1m~1.5mを測る。溝内の堆積層は、断面観察の結果、西側溝が先行してつくられ、埋没した段階で東側の溝が掘られたものと考えられる。西側溝は、第3層茶褐色土を切り込んでつくられている。溝内の堆積層は、7層に分けられる。

1層 暗茶褐色土で、溝を人為的に埋め戻した時の埋土と考えられる。黄色粘質土のブロックを含む。

2層 暗灰褐色砂質粘土。

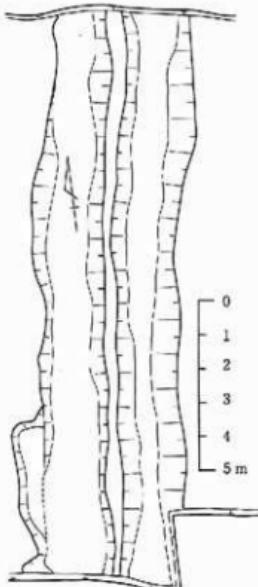
3層 茶褐色土。

4層 茶褐色混じり淡黄褐色粘土層。

5層 茶褐色混砂層。

### 土坑1

1辺1mのはば方形の掘り方で深さ51cm、底部はすり鉢状に凹む。内部には、炭化物（わら状のものか）が多量に含まれ、底部より自然石、瓦器碗が出土した。壁面には焼けた痕跡は認められなかつた。



第9図 大溝1・2実測図

## ピット群

ピット14・15・20・21・26・27はいずれも1辺25cm、深さ10cmの規模で方形を呈している。とくにピット14・26・27は一直線上に並ぶところから横列などの可能性が考えられる。

## 骨壺（第10図-1）

4地区で検出した。骨壺は、備前焼きの壺を転用したもので、径約1mの掘り方内に正立した位置で据えられていた。壺内には、漆器碗が認められた。壺は、口径25cm、高さ49cmを測る。平底の底部から、釣鐘状の脚部に直立する口縁部が付く。口縁端部は、玉縁状を呈する。体部と肩部に櫛描直線文を施す。

## 3. 出土遺物

### 瓦（第11図・12図）

瓦類は、包含層中から多量に出土している。

(2)は、素弁蓮華文軒丸瓦である。(4)は、複弁蓮華文軒丸瓦である。複弁蓮華文を内区主文とし、外区部が二重縁となっている。内縁には、二重圓線の中に連珠文を飾り、外縁は内面が内傾する三角縁に線彫変形蓮華文を配す。中房は大きく低いので、周縁には界線をめぐらさない。蓮子は、周環が消失したもので、1+8+12と三重の配置である。花弁は、中央の稜線で二面分割され、子葉は細長く丸味がある。弁端は切り込みがあり、反転を表している。

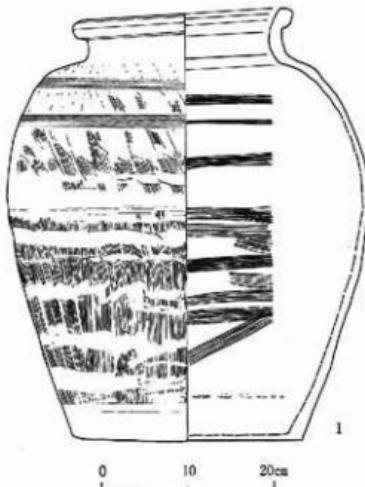
花弁の輪郭と間弁は一連となり、弁中2個の子葉には、それぞれ輪郭線のある特殊な重弁形複弁蓮華文である。この花弁の類型は、藤原宮に類似がある。

(3)は、複弁蓮華文軒丸瓦で、川原寺式と呼ばれている。複弁蓮華文を内区主文として、中房は大きく低い。界線はない。周環をもつ蓮子を配している。

(6)は、複弁蓮華文軒丸瓦で、外区に圓線、珠文を配し、周縁に文様はない。奈良時代前期に属する。(5)は、細弁蓮華文軒丸瓦である。外区に珠文、周縁に鉗齒文を飾る。奈良時代後期に属する。(8)は、蓮華文軒丸瓦である。蓮華を斜め上から見た様子を写実的に表したもの、花弁と中に蓮子が5個表現されている。外区に大きく密な珠文をめぐらす。平安時代後期に属する。

(7)は、素弁蓮華文軒丸瓦である。外区に密な珠文をめぐらす。平安時代後期に属する。

(9)は、巴文軒丸瓦である。左回りの巴文。巴文が勾玉状を呈し、巴の外縁に界線をもち、



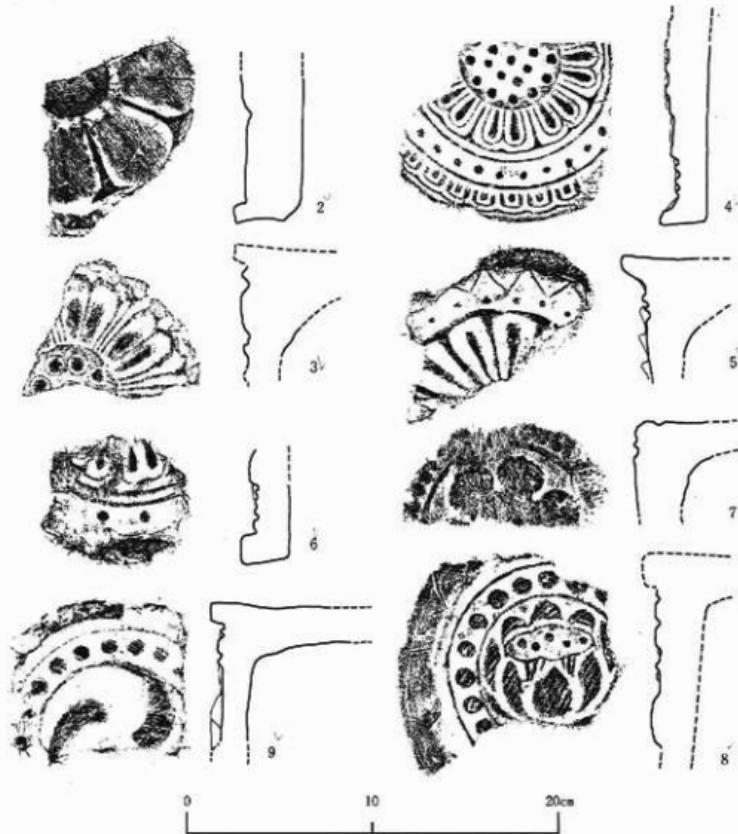
第10図 備前焼壺

珠文を配す。

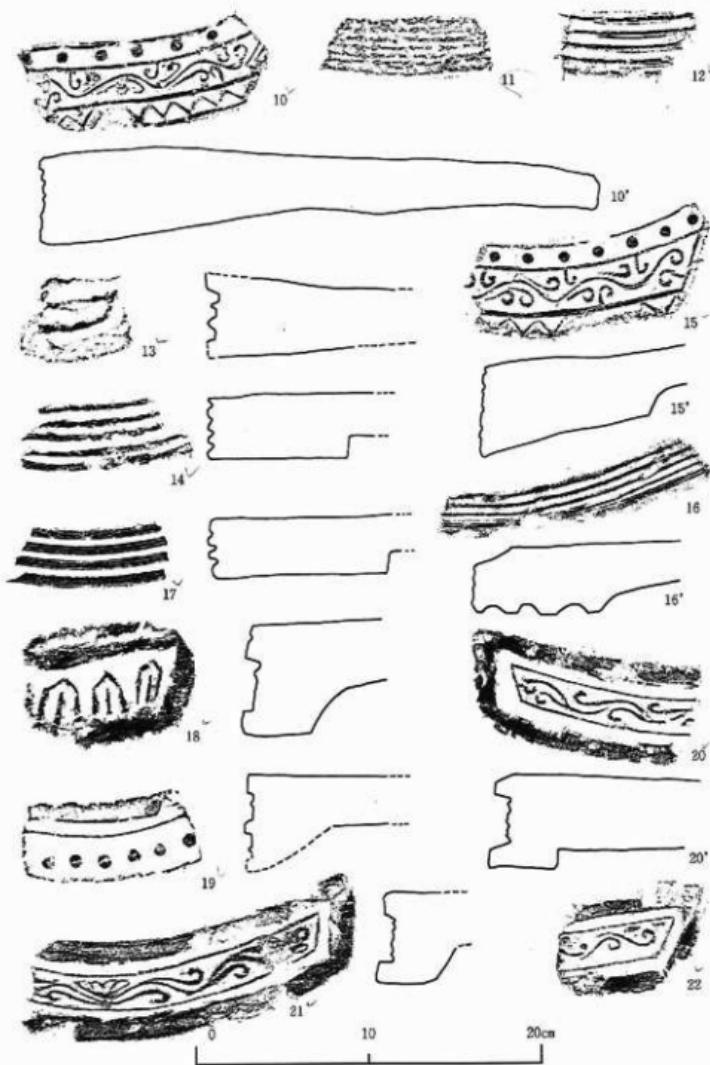
#### 軒平瓦

(10・15) は、偏行唐草文軒平瓦である。内区に右に偏行する波状唐草文を飾り、外区上に珠文を外区下に鋸歯文を飾る。唐草文は、中央に連続波状の茎をもち、茎から上下に2本の枝葉が派生している。枝葉の向きが左右で異なっている。類例が藤原宮にみられるほか、各地に多くある。直線額(10)と段額(15)の両方がある。

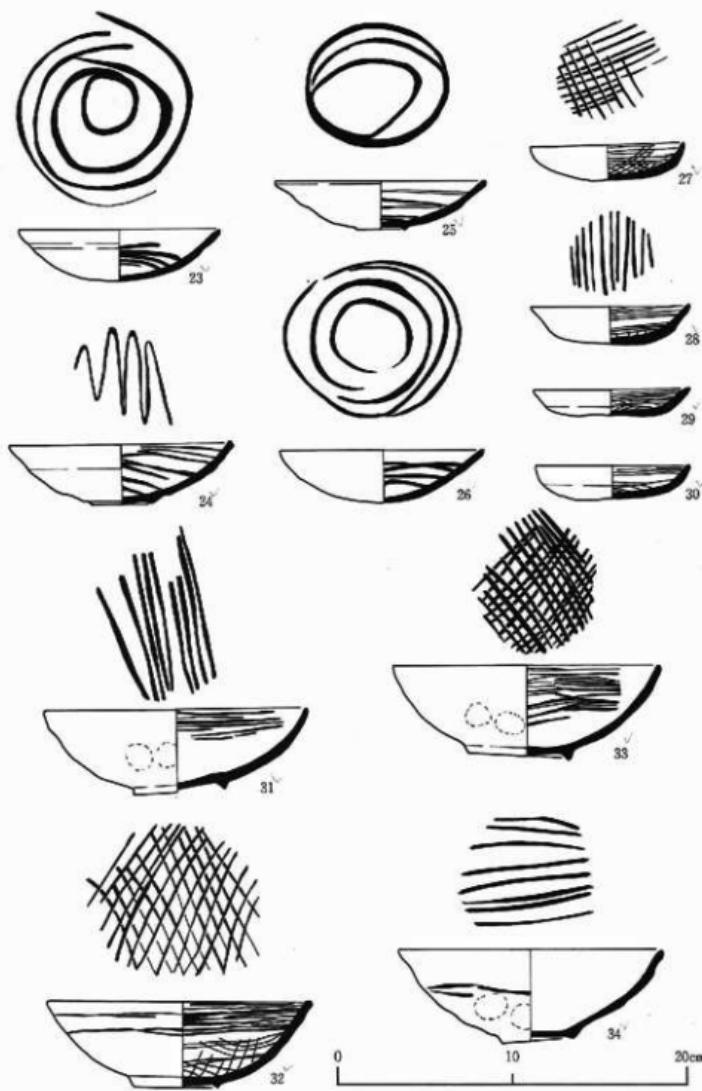
(11・12・14・16・17) は、重弧文軒平瓦である。半裁竹管の押し引き手法によるもので、四重弧文と五重弧文とがある。額は、段額になる。原体不明の押し引きによる重弧文軒平瓦は、段額の凸面に3条の太い凹線が認められる。



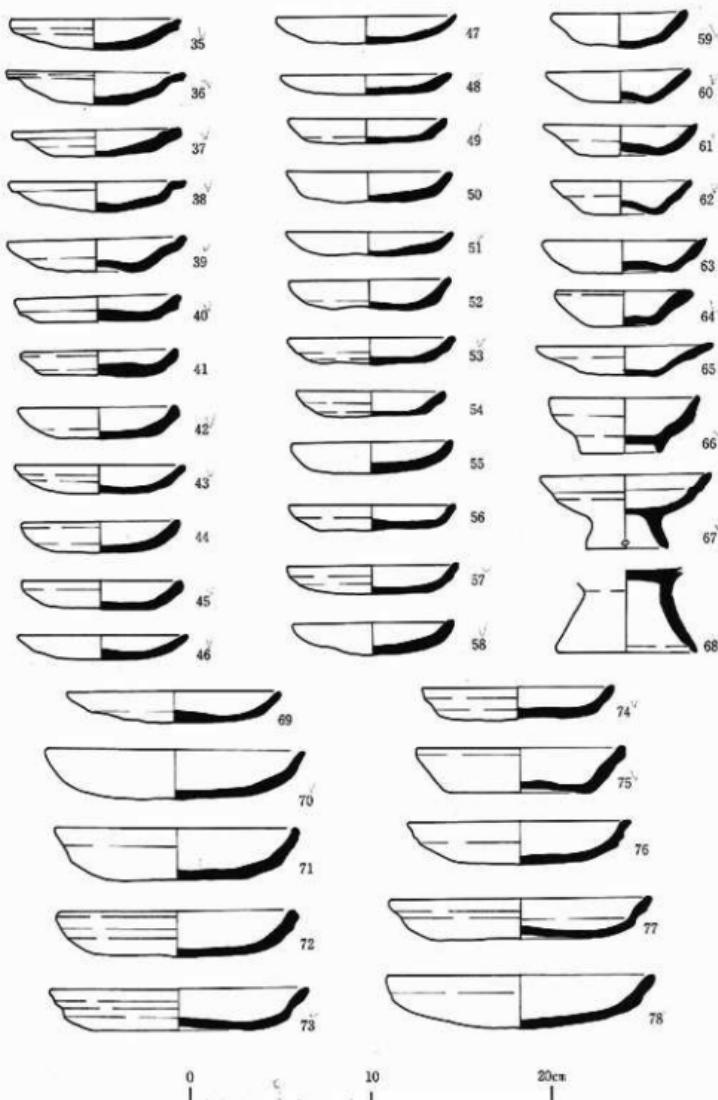
第11図 出土軒丸瓦拓本



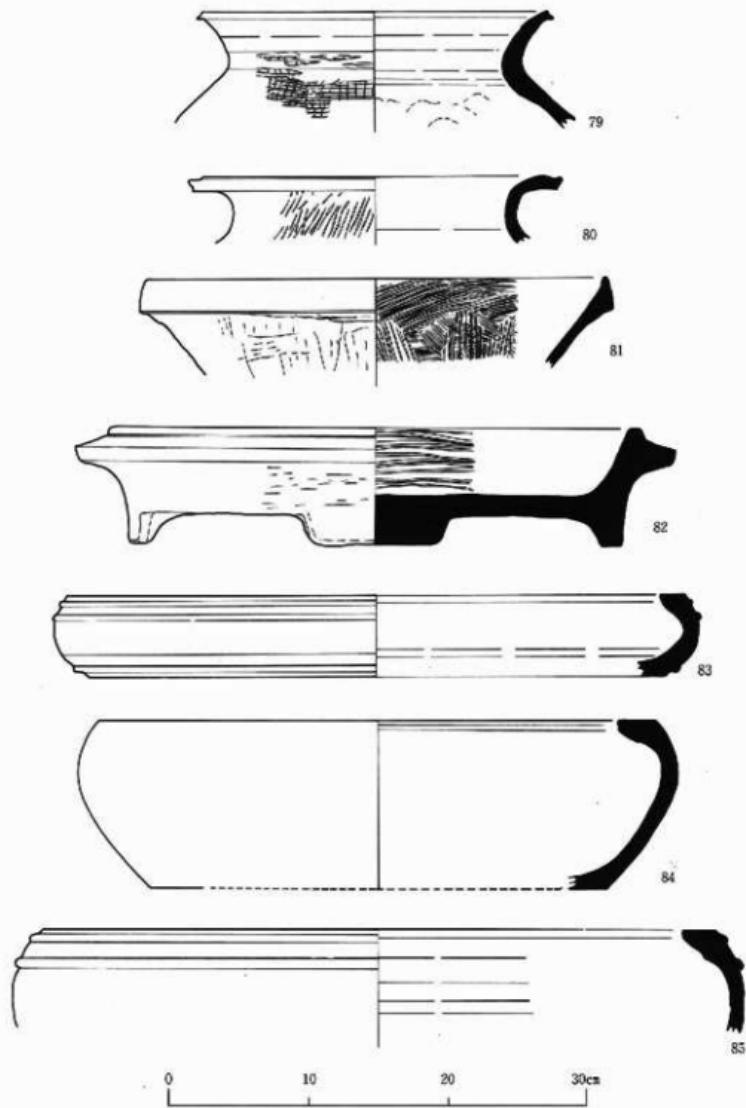
第12図 新平瓦拓本



第13図 瓦器碗実測図



第14図 土器器皿実測図



第15図 壺・鉢・火舍実測図



第16図 石鉢・羽釜・磁器類実測図

(19) は、連珠文軒平瓦である。瓦当面に珠文を配したもの。大きく扁平な珠文を配し、外縁との間には界線が入る。額は曲線額である。

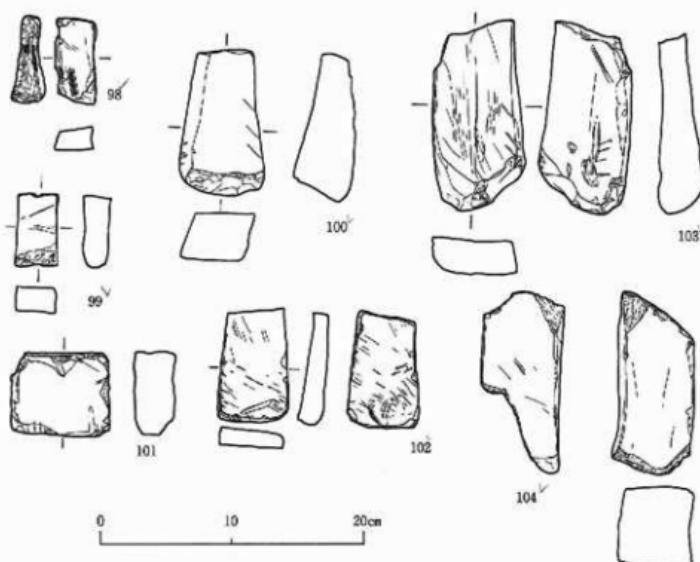
(20~22) は、均整唐草文軒丸瓦である。内区に左右対象の唐草文を配し、外縁との間に界線が入る。額は曲線額である。

#### 瓦器碗 (13図)

4 タイプの瓦器碗が出土している。

A型式 (32・33) 体部は外上方に向かって立ち上がり、端部は丸く終わる。体部外面の暗文は、粗くなり、見込みの暗文は斜格子である。(33) は、口径15.2cm、高さ5.2cm、径高指指数34.2を測る。(32) は、口径15.2cm、高さ4.9cm、径高指指数32.2を測る。

B型式 (31・34) 体部外面のヘラミガキは、A型式よりさらに粗くなり、見込みの暗文は平



第17図 石器実測図

行線状になる。(31)は、口径15cm、高さ4.8cm、径高指数3.2。(34)は、口径15.2cm、高さ4.9cm、径高指数32.2を測る。

C型式(24)体部外面、内面の暗文は、さらに粗くなり、高台も低くなる。(24)は、口径12.8cm、高さ3.5cm、径高指数27.5を測る。

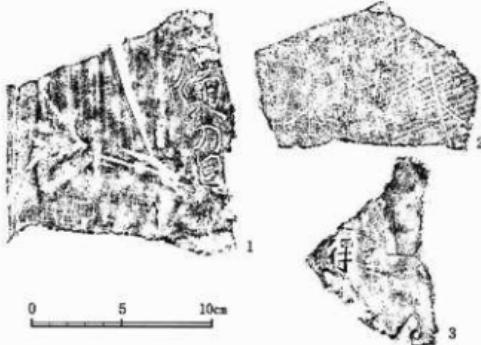
D型式(23・25・26)体部外面の暗文はほとんどなくなり、内面の暗文もさらに粗くなる。高台は、わずかに残る程度になり、径高指数も23.1~25.9を測るようになる。

#### 瓦器小皿(27~30)

丸底で外上方に外反する口縁部に端部は丸く終わる。見込みに斜格子又は平行線状の暗文を施す。

#### 土師器皿(第14図)

大きく3型式に分類できる。  
A型式(35~38)丸底の底部より、体部が内弯し、口縁部は



第18図 文字瓦拓本

外反し、端部を内側に肥厚させる。(36) のように口縁部を2段に屈曲し、玉縁状を呈するものもある。

B型式(39~58・70~78)もっとも量が多い。丸底に近い平底の底部より口縁部が外反する。口縁端部は、丸く終わる。底部と体部の境が明瞭で稜をなすものもある。

C型式(59~65・69) 平底の底部より体部が大きく逆ハの字形に開く。口縁端部を尖り気味に終わる。指頭圧痕が明瞭で体部下半が凹む。

#### 台付皿(66~68)

低い高台が付き、深い杯部をもつもの(66)と高い脚台に内寄する杯部が浅く、口縁部が二段に屈曲するタイプ(67・68)がある。

#### 羽釜(第16図)

瓦質と土師質の違いがある。土師質の羽釜には、球形の体部に口縁部が内傾して終わり、口縁端部は面をもつもの(87・90)と体部の張りが少なく、口縁が短く外反するものと、大きく外上方に外反するもの(89)とがある。瓦質の土器(88)は、体部の張りが少なく、口縁部が内傾し、外面に三条の凹線をめぐらす。

#### 磁器

青磁(91・93)、白磁(92・96・97)、灰釉陶器(94・95)がある。

#### その他の土器

甕(79)の字状に外反する口縁部で端部は面をもって終わる。(80)は、口縁部が水平近く外反し、端部をわずかにつまみ上げ気味にする。掘り鉢(81)は、斜め上方に開く体部に口縁部がやや内傾し、端部は尖り気味に終わる。火舎(82)は、脚部をもち、体部が方形を呈するものと円形の体部に口縁部が内傾するもの(83~85)とがある。

砥石(98~104)すべて長方形を呈し、四面とも使用による摩滅が著しい。(103)は大きなもので、長辺14cm以上を測る。

#### 文字・文様瓦(第18図)

(105)は、平瓦の内面にヘラ描きで「廣刀自」、(107)は、平瓦の内面に「○得」とスタンプで文字が認められる。(106)は、ヘラ描きで平瓦の内面に馬が描かれている。

### III.まとめ

今回の調査地内では、厚さ約20~30cmにわたって遺物包含層を検出した。包含層内からは弥生時代から室町時代までの遺物が出土している。今回検出した遺構面は一回だけであるが、何回かにわたって整地が繰り返されたものと考えられる。

今回の調査で検出した遺構には、掘立柱建物・井戸・溝・土坑などがある。これらの遺構の時期は、13~15世紀に属すると考えられ、時間的な幅がある。大溝・掘立柱建物は、15世紀頃の最終時期の遺構と考えられる。井戸・土壙などは出土遺物から13~14世紀頃に属すると思われる。これらの遺構は、若江城に直接結びつく遺構かどうか不明である。

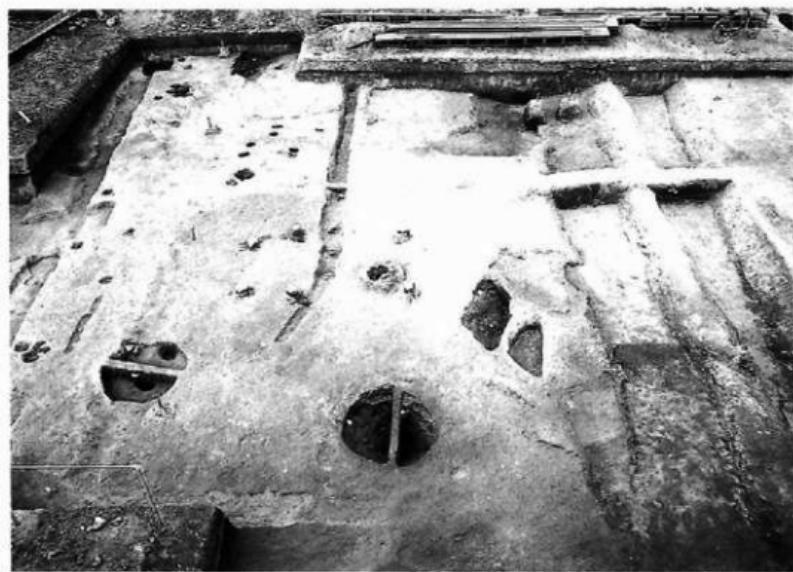
今回の出土遺物には、瓦類が多量に含まれている。瓦類は、飛鳥・白鳳時代から室町時代頃までのものが含まれている。今回の調査では、井戸1の井戸枠として白鳳時代の軒丸瓦を転用している例を除くと遺構に伴うものではなく、総て包含層中よりの出土である。これらの瓦は、若江寺・若江城に使用されたものと考えられる。



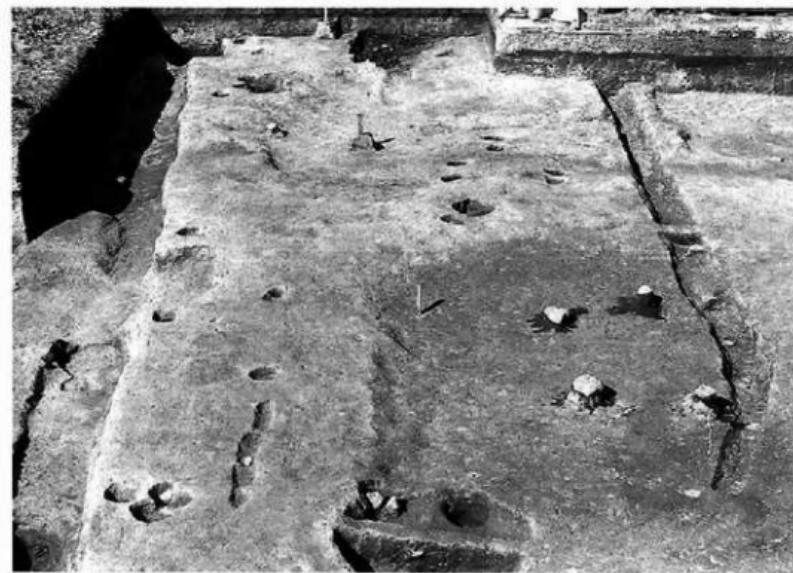
1. 調査地航空写真



2. 作業風景



1. 調査地遺構全景（南より）



2. 土壇状遺構と柱穴群（南より）



1. 調査地道構全景（北東より）



2. 調査地全景（西より）



1. 漢・土壙状遺構全景（南より）



2. 井戸 2 全景



1. 1·2 地區西壁斷面



2. 3 地區西壁斷面



1. 大溝 1・2 全景



2. 大溝內火舍出土狀況



1. 土坑內 灰釉陶器出土狀況



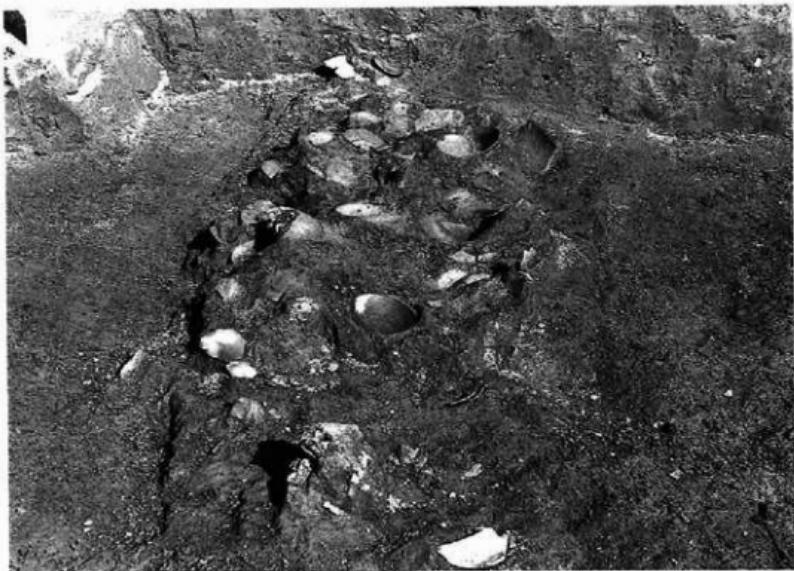
2. 土坑內 瓦器出土狀況



1. 土坑內土器出土狀況



2. 土坑內土器出土狀況



1. 3 地區 土器出土狀況



2. 3 地區 土坑 4 土器出土狀況



1. 3 地區軒平瓦出土狀況



2. 4 地區土師器皿出土狀況

1. 井戸 1 と覆屋礎石  
検出状況



2. 井戸 1 検出状況



3. 井戸 1 内部の状況





1. 壺棺検出状況



2. 壺棺検出状況



3. 壺棺内部の状況

1. 土坑 1 上層瓦器範  
出土狀況



2. 土坑 1 中層繩檢出  
狀況



3. 土坑 1 下層繩檢出  
狀況





1. 井戸4上層検出状況



2. 井戸4中層検出状況



3. 井戸4下層検出状況



1. 軒丸瓦 (2~6, 8·9)



10



12



15



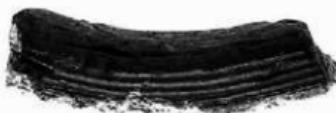
17



108



110



16



109



112

1. 軒平瓦 (10~12・15~17・108~110)



21



13



19



18



20



111



22



112



82



113



82



114

軒平瓦（13・18～22・111・112）、火舍（82）、錢貨（113・114）



115



116



117



118



119



117'



118'



119'

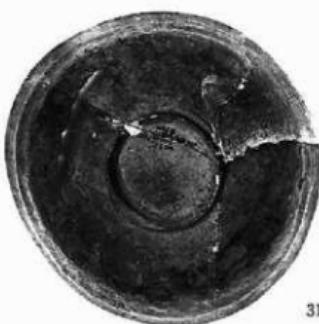
瓦 (115~116)、平瓦 (117~119).



31"



33"



31'



33'

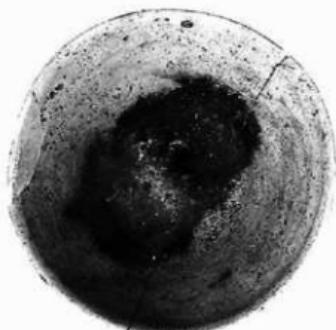


31

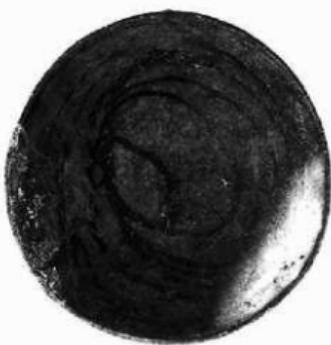


33

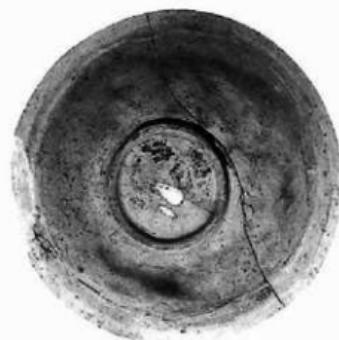
瓦器椀 (31・33)



120"



25"



120'



25'



120



25

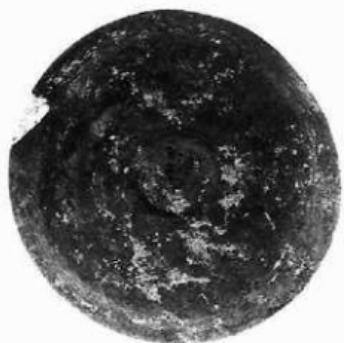
瓦器碗 (25·120)



24"



122"



24'



121'



24



121

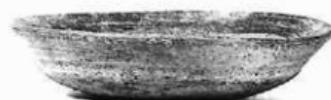
瓦器椀 (24・121)



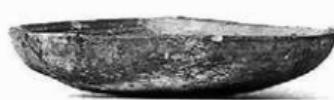
28'



27'



28



27



30



29'



125

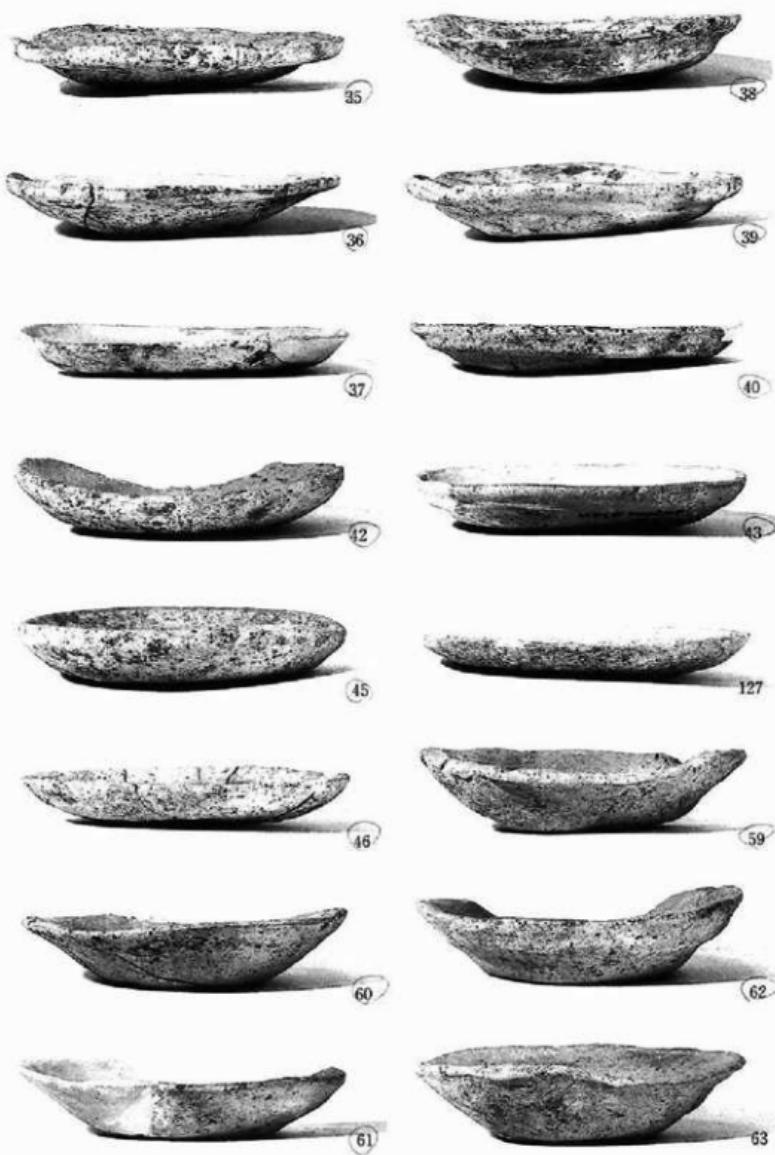


126

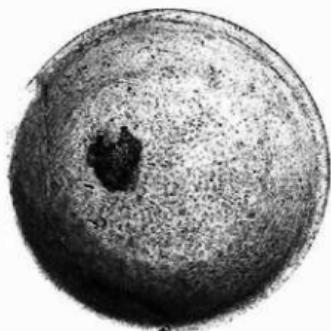


29

瓦器小皿 (27~30・125)、須恵器杯 (126)



土器皿 (35~40・42・43・45・46・59~63・127)



95"



91"



95"



91"



95



91

青磁碗 (91)、灰釉陶器 (95)

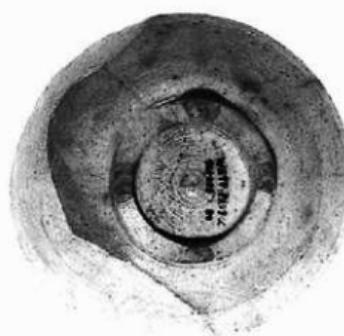


94"

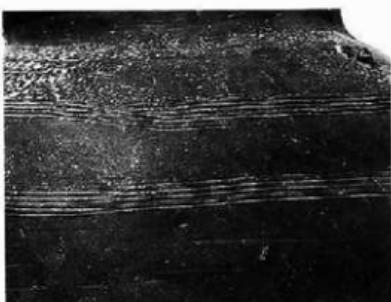
1



1'

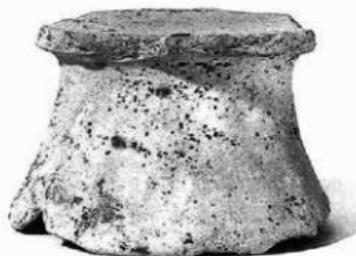


94'



94

備前燒骨壺（1）、山茶碗（94）



68



67



129



131



130



66

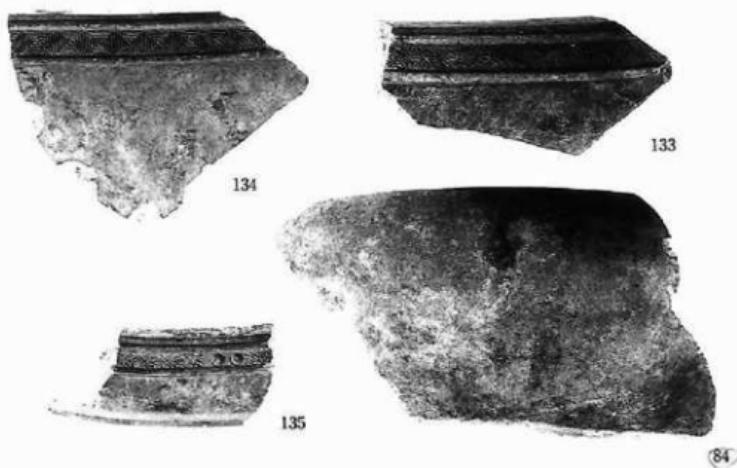


131



132

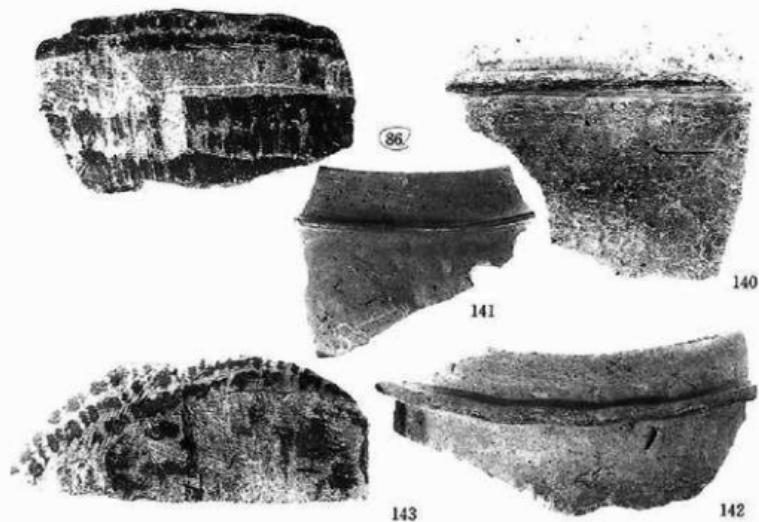
土師器脚付杯 (66~68・131)、須恵器杯 (130)、石仏 (132)



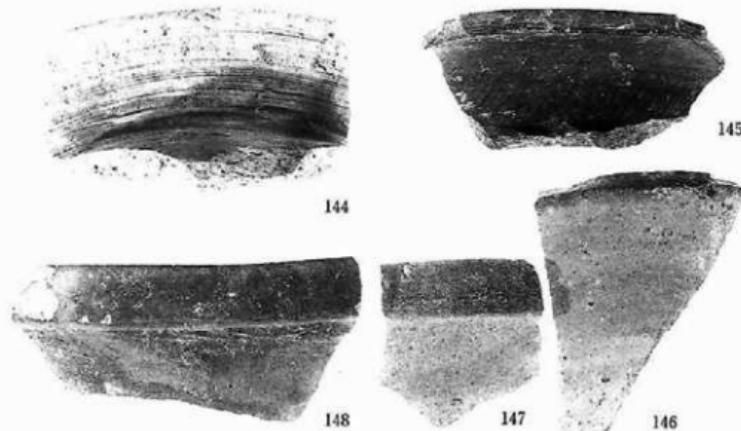
1. 火舍 (84・133~135)



2. 青磁 (136)、白磁 (137~139)



1. 石鍋 (86~143)、羽釜 (140~143)



2. 頸忠器鍊鉢 (146~148)、堺 (144~145)

## 西堤遺跡第4次発掘調査概報

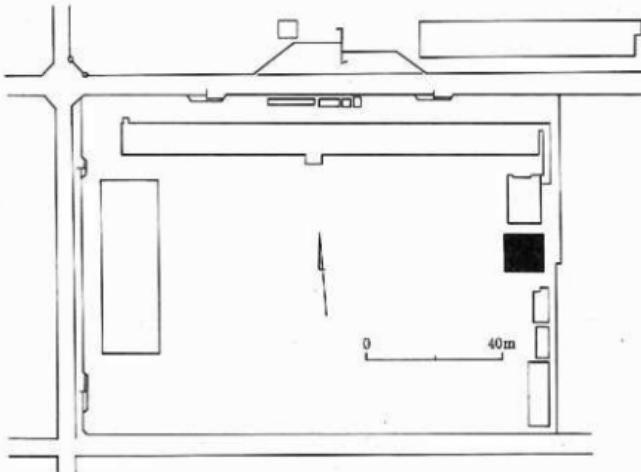
### I. 調査に至る経過

西堤遺跡は、西堤学園町2丁目、3丁目を中心にして、東西約400m、南北約500mに広がる遺跡である。昭和43年、今回の調査地点の南東約300m付近での下水道工事中、須恵器、土師器、馬骨が出土したことからその存在が認められるようになった。

昭和51年、東大阪高等学校の校舎増築工事に伴う発掘調査が実施され、10~50cmの厚さの包含層2層、古墳時代後期初頭の須恵器、土師器、獸骨類、奈良時代以降の墨書き土器、朱塗りの皿、貨幣（承和昌寶-836年鋳造）、綠釉土器、瓦などを検出した。このことから、この遺跡が古墳時代から歴史時代に至る遺跡であることが判明した。

昭和52年、市立西堤小学校校舎増築工事に伴う発掘調査が実施され、遺物包含層4層と古墳時代から歴史時代（鎌倉時代）にいたる須恵器、土師器、瓦器、輸入陶磁器、土錠などを検出し、遺跡が鎌倉時代にまで続くことが判明した。同年、東大阪高等学校、東大阪短期大学学生寮建設工事に伴う試掘調査が実施され、地表下0.9~1.4mの暗灰色粘土から瓦器、ドブガイが検出されたが、前後の堆積状態から沼地であり、集落の立地には適さない場所であることが明らかとなり、遺跡の中心は、この地点の東南及び南方向であることが推定された。

今回、第2次調査地点のすぐ南側で校舎増築工事が計画された。既存の調査成果から古墳時代から歴史時代に至る遺構、遺物が検出される可能性が高いため、工事に先だって発掘調査を実施した。調査は1教室分約130m<sup>2</sup>で、昭和54年10月22日から11月10日まで現地調査を行った。



第1図 調査地点位置図

## II. 位置と環境

西堤遺跡は、東大阪市西堤学園町2丁目～3丁目、西堤本通東3丁目、川原、藤戸新田、長田、長田西1丁目、御厨西ノ町、御厨北ノ町一帯に所在する古墳時代から歴史時代（鎌倉時代）にかけての複合遺跡である。

本遺跡の立地は、河内平野のほぼ中央部にあたり、現地表面の標高は0.5m～1.5mである。現在遺跡の周辺は、住宅や工場などが立ち詰まり、すっかり市街地化しているが、明治20年の地図を見れば、今回の調査地の北西約450mに西堤村、北約770mに川俣村、東約450mに長田村、南東約450mに御厨村の集落があり、西約780mに旧大和川の本流の一つ長瀬川が、東約280mに分流の一つ桶狭川が流れていって、遺跡はこの二つの川にはさまれた後背湿地にあり、地図では水田となっている。現在の地形は平地がずっと広がっているが、古代においては現在の様相とは違った地形であった。

1万5千年前より太陽の活動が活発となり地球全体が温暖化し海面の上昇がおこった。7000～6000年前には生駒山麓まで海水が侵入した。東大阪市西石切町5丁目の鬼虎川遺跡では、海水によって陸地が削られた海食崖、クジラ、イルカ、サメ、フグ、アカエイ、サワラ、スズキ、シャミセンガイなどの海棲動物遺体がみつかっている。この広大な水辺は河内湾と呼ばれている。しかし、海水の入口に砂州が形成され湾内はだいに淡水化する。また、淀川や大和川が土砂を運び堆積させたため陸地が広がっていく。「古事記」雄略天皇の歌に答えた引田部の赤猪子の歌に「日下江の 入江の運 花蓮 身の盛り人 漢しきるかも」や『万葉集』卷四、大伴旅人の歌に「草香江の 入江にあさる 鞍鶴の あなたたずたずし 友無しにして」は往古の地形を推測させるものである。この広大な水面は大和川が付替られる江戸時代中期まで残る。この入江の岸辺近くには古代から集落が形成される。縄文時代では善根寺遺跡（中期）、日下遺跡（後期～晩期）、芝ヶ丘遺跡（後期～晩期）、鬼塚遺跡（後期～晩期）、繩手遺跡（中期～晩期）、馬場川遺跡（後期～晩期）がある。弥生時代にはいると水田農耕が開始されるようになり低湿地にも集落が形成される。西堤遺跡の西北西1.7kmに高井田遺跡（前期）、南東2.2kmに瓜生堂遺跡（前期～中期）、2.4kmに巨摩廃寺遺跡（中期～後期）、2.6kmに若江北遺跡（前期～後期）、3kmに山賀遺跡（前期～後期）、東4kmに鬼虎川遺跡（前期～中期）、北東6kmに中垣内遺跡（前期～後期）、南南東2.7kmに上小阪遺跡（後期）、南4.7kmに久宝寺遺跡（中期）、南南西4.7kmに加美遺跡（中期～後期）がある。古墳時代になると東南東1.5kmに新家遺跡（前期～後期）、南東1.3kmに意岐部遺跡（前期～後期）、1.7kmに西岩田遺跡（前期～後期）、南2.8kmに小若江遺跡（前期～後期）、3.5kmに赤力遺跡（前期～後期）がある。

こうした集落は河川の自然堤防上や河川が形成した三角州上の微高地に作られ、後背湿地を水田として利用して営まれていたと考えられる。



第2図 遺跡周辺図 (1/25,000)

### III. 調査概要

今回の調査地点は、市立西堤小学校敷地の北東隅にあたり、第2次調査地点のすぐ南側で、東西10.9m、南北11.9mの範囲、計130m<sup>2</sup>について実施した。調査は、現地表面から約1mまで機械により掘削し、それより以下1.5mの堆積層を一層一層分層し発掘した。

#### 層序

今回の調査で得られた層序は、以下の通りである。

第1層 盛土。学校建設時のものである。

第2層 耕土。

第3層 淡青灰色粘質土。厚さ約16cm。南側が厚く北へ行くほど薄くなる。

第4層 淡青灰色シルト。最大の厚さ24cm、東にゆくにしたがい厚くなる。土師器羽釜、磁器片が出土。近世以降に堆積した層である。

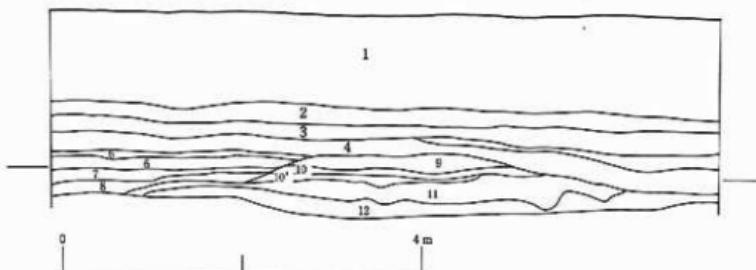
第5層 淡青灰色細砂。厚さ5~8cm。金雲母を多く含み、褐色のマンガン、鉄の斑点がいたるところで見られる。須恵器甕、杯身、土師器高杯脚部、羽釜の破片が出土。

第6層 灰色粘土。厚さ10~28cm。鉄、マンガンを多く含み、植物の細かい根が網の目状に多く混入している。亀甲状のひび割れが入り、その中に赤褐色のマンガンがみられる。寒暖や乾湿によってなったものと考えられる。これらのことから、この層は水田の耕土であった可能性が高い。ここからは須恵器甕、土師器羽釜、杯、小皿、瓦器碗、土鍤、平瓦が出土した。瓦器碗、土師器小皿より13世紀後半頃の時期と考えられる。

第7層 褐色土混じり灰色粘土。厚さ12~30cm。須恵器片、土師器羽釜、把手、杯、甕、碗、高台部、小皿、瓦器碗、羽釜脚部、白磁片、鐵器が出土した。6~8世紀代と思われる遺物が多いが、瓦器碗から13世紀代の時期と考えられる。

第8層 青灰色粘土。厚さ18~26cm。須恵器杯、土師器甕、皿、瓦器の細片が出土した。瓦器碗より12世紀代の時期と考えられる。

第9層 赤褐色粘質土。厚さ16~48cm。道路状造構の造構面となっている。褐色のマンガン、鉄分が沈着している。土師器細片3点が出土したのみで時期は不明である。



第3図 層位図

第10層 暗茶褐色粘質土。厚さ16~38cm。炭化物、遺物を多く含む。須恵器杯身、杯蓋、壺、土師器壺、羽釜、杯、カマド、土錐、黒色土器椀、鉄器が出土。6~9世紀の遺物と考えられる。この上面で溝1条を検出した。

第11層 暗黄褐色粘質土。厚さ16~27cm。溝、土坑の造構面となっている。須恵器、土師器壺の細片を含む。

第12層 淡青灰色砂質土。厚さ30cm以上。須恵器杯、土師器の細片を少量含む。

#### 造構

造構面を4面検出した。第5層上面で土坑1基、第9層上面で道路状造構と足跡、第10層上面で溝1条、第11層上面で溝2条、土坑3基である。

#### 土坑1（第4図）

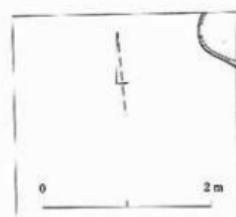
調査地東端中央部で検出した。第5層上面より切り込む。半分は調査地外にある。楕円形を呈すると考えられる土坑で、検出した部分で東西1.05m、南北1.15mある。断面は皿状を呈し、中央での深さ0.08mを測る。炭化物を多く含み、底は火を受けて暗茶褐色に変色している。遺物は全く出土しなかった。

#### 道路状造構（第5図）

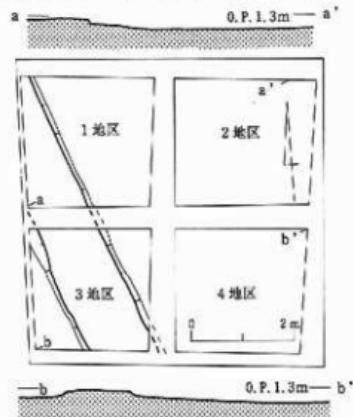
調査地の西半で検出した。第9層上面にあり南東から北西方向に延びている。上面幅2.2~2.5m、下面幅2.8~2.9mを測る。道路状造構の両側、やや下がった所に第6層灰色粘土の堆積がみられる。前述したように、層中に植物の細かい根が多くみられること、亀甲状のひびがあることなどから、水田の耕土と考えられ、水田を両側にひかえた中を通る道であったと考えられる。この道路状造構の上面で足跡を1個検出した。この足跡は、成人の右足部分で親指から小指までみられることから素足であったものと思われる。

#### 溝1（第6図）

第10層上面、調査地西南部で検出した。溝は調査地内から始まっており、南東方向に延びる。規模は、幅16~40cm、深さ4~12cmで南に行くにつれて深さを増している。須恵器、土師器、製塩土器が出土した。6世紀前半から8世紀にかけての遺物であるが、掘削あるいは埋没した時期は堆積層序からして9世紀以降と考えられる。



第4図 第5層上面土坑1



第5図 道路状造構

溝2（第7図）

調査地西半で検出した。第10'層上面にあたりアルファベットのA字状を呈するが、西及び北は調査地外に延びているため形態は不明。規模は、幅48~97cm、深さ10~37cmで、A字型の周辺部から中央部に向かって深さを増しさらに北西方に向延びて行くものと思われる。溝内の堆積は4層に分けられ、第1層が暗茶褐色粘質土、第2層が黒灰色土、第3層が暗褐色土、第4層が青灰色シルトである。溝内から須恵器、土師器、鉄器の細片が出土した。時期は不明である。

土坑2（第7図）

調査地中央部で検出した。第10'層上面から切り込んでいる。楕円形で規模は長径80cm、短径73cm、深さ17cmで皿状に落ち込む。堆積土は2層に分かれ、上層は暗茶褐色粘質土、下層は黒灰色粘質土である。下層は灰が堆積したものであるが、底に焼けた痕跡はない。両層から土師器の細片が出土した。時期は不明である。

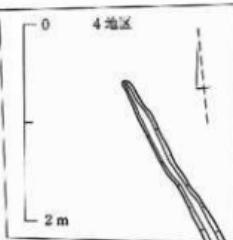
土坑3（第7図）

調査地中央やや南よりで検出した。第11層上面から切り込んでいる。104cm×90cmの不定形な四角形である。深さ10cmで皿状に落ち込む。堆積土は暗茶褐色粘質土で、須恵器、土師器の細片が出土した。時期不明である。

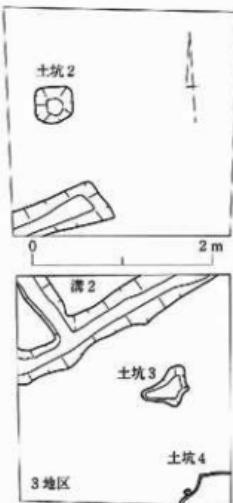
土坑4（第7図）

調査地南端中央で検出した。第11層上面から切り込んでいるが大部分が調査地外にある。皿状に落ち込み、深さ10cmを測る。土師器壺、カマド、羽釜、サヌカイトの細片が出土。時期は不明である。

#### 出土遺物



第6図 溝1

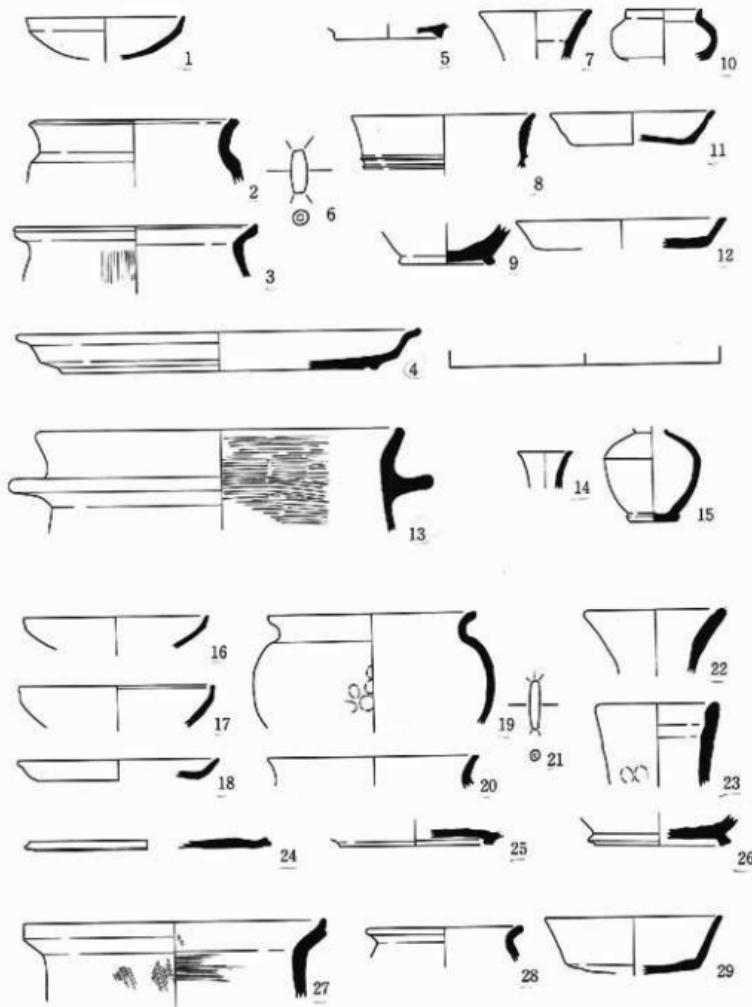


第7図 溝2・土坑2~4

今回の調査では奈良時代から江戸時代に至る遺物が主に包含層から出土した。須恵器壺、杯、土師器高杯、羽釜、杯、小皿、壺、把手、竈、土鍤、黒色土器片、瓦器椀、白磁片、磁器片がある。圧倒的に多いのは奈良時代から平安時代にかけてのものである。大部分が細片であり図化できるものだけを掲載した。1は第5層、2~12は第6層、13~15は第10層、16は溝2、17~26は第10'層、27、28は第11層、29は第12層出土である。

#### 第5層出土遺物

1は土師器椀である。口径11.6cm、器高3.2cm。丸底の底部から内湾しながら立ち上がる体部をもつ。口縁部は強くヨコナデするため外反し、端部は丸くおさめる。クサリ縫がみられ



第8図 遺物実測図

0.5mm以下の長石の石粒を多く含む。色調は灰白色（7.5Y8/3）である。

第6層出土遺物

2、3は土師器甕である。口径14.3cm、17.6cm。口径と体部径がほぼ等しく、体部最大径が

中位に位置するものである。2は口縁部のナデが強いため外反し体部との境に棱線を生じる。口縁端部は面をもちそこに1条の凹線を施す。0.5mm以下の長石を多く含む。色調は橙色(7.5YR7/3)である。3は体部がやや長胴で外面を粗くタテハケ調整するものである。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は面をもち1条の凹線を施す。長石を少量含む。色調は灰白色(5YR8/2)である。4は土師器皿である。口径29.7cm、器高2.9cm。大きな口径をもち、短く斜め上方へ伸びる口縁部と平らな底部とからなる。口縁端部は内側へ肥厚させ小さく丸め込むものである。底部外面はヘラケズリしたあと低い断面台形の高台を貼り付ける。色調はにぶい橙色(5YR7/4)である。5は土師器の杯か皿の高台部である。底径7.7cm。断面三角形のしっかりとしたものである。色調は浅黄橙色(10YR8/3)である。6は土鉢である。外径1.2cm、内径0.4cmである。胎土には0.5mm大の長石粒を多く含む。色調は灰白色(2.5Y8/2)である。7は須恵器平瓶または長頸壺の口縁である。口径7.8cm。口縁部は外反し端部は丸く收める。色調は青灰色(5BG5/1)である。胎土には0.3mm以下の細かい長石粒を多く含む。8は須恵器皿の口縁部と思われる。口径13.3cm。細片での復元であるため口縁部が直立ぎみであるがもっと外傾するものと思われる。頸部と口縁部との境界には鋭い凸帯が2条めぐる。口縁部はヨコナデで端部は丸く收める。色調は灰色(N5/0)で、口縁部内面に自然釉がみられる。9は須恵器壺の高台部である。底径6.3cm。底部外周のわずか内側から、外方へふんばった短い高台がつく。体部内面はヨコナデ調整するが凹凸が激しい。色調は灰白色(7.5Y8/1)である。10は須恵器短頸壺である。口径5.4cm、器高3.7cm。短く直立する口縁をもつ。口縁端部は丸く收める。体部最大径は中位にあり、肩の張りはなく丸くながらかに下がる。体部は低く扁平である。いわゆる薬壺形土器と呼ばれるもので蓋を伴うものが多い。体部はヨコナデ調整である。底部はへら切りの平底と思われる。色調は灰白色(N7/0)である。口縁から体部にかけて自然釉がつく。11、12は須恵器杯である。11は外方へ聞く体部を持つ。口縁端部は丸く收める。口径11.8cm、器高2.4cm。体部はヨコナデ、底部および底部と体部の境界はヘラケズリである。色調は橙色(2.5YR6/6)である。0.5mm以下の細かい長石粒を多く含む。12は短く外方へ傾き、端部は平になでて狹小な面をなす。体部はヨコナデである。口径15.4cm、器高2.1cm。色調は灰白色(7.5Y8/1)である。

#### 第10層出土遺物

13は土師器羽釜である。口径26.7cm、鉢径31.6cm。長胴の胴部から外反しながら伸びる口縁部をもつ。頸部あるいは肩部に幅の広い飼をめぐらす。口縁部はヨコナデ、胴部内面は横方向のハケメである。胎土には0.2~2mm大の長石、金雲母、角閃石を多く含む。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。14は須恵器瓶または長頸壺の口縁部である。口径3.6cm。短小な口縁部で外反しながら立ち上がる。端部は内傾する面をもつ。色調は灰色(N6.5/0)である。15は須恵器瓶または長頸壺の体部である。最大腹径7cm。体部は肩部に丸みをもち、器体はやや高めである。底部は糸切りの平底である。色調は灰色(N8/0)である。

## 溝2出土遺物

16は土師器壺である。口径15.1cm、最大腹径17.5cm。球形に近い器形と、強く外反する口縁部からなる。口縁端部は外方にやや肥厚する。口縁部はヨコナデ、体部はナデである。胎土には0.1~0.5mm大の長石、石英を多く含む。色調は赤橙色(10R6/8)である。

## 第10層出土遺物

17は土師器壺である。口径15.3cm。短くゆるやかに外反しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は平らな面をもつ。口縁部はヨコナデである。18、19は土師器杯である。丸底に近い小さな平底から内弯しながら斜め上に大きく開く口縁部からなる。18は口縁端部が内側に丸く肥厚するが肥厚は小さい。口縁部、体部はヨコナデである。口径14cm。色調は橙色(5YR7/6)である。19は口縁部のヨコナデが強いためやや外反する。口径13.3cm。胎土に0.2~0.6mm大の長石、石英を多く含む。色調は橙色(5YR7/6)である。19は土師器皿である。口径14.6cm、器高1.5cm。外上方に短く立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸く収める。底部と体部の境界付近を強くヨコナデするため稜を形成する。色調は淡橙色(5YR8/4)である。21は土錐である。外径0.8cm、内径0.2cm、長さ3.6cm。胎土には0.2mm前後の長石を多く含む。色調は淡赤橙色(2.5YR7/3)である。22、23は製塙土器である。口径は22が10.4cm、23が8.4cmである。器壁の厚さは22が8~9mm、23が7~9mmである。器形は砲弾形で口縁部はやや外反し、底部は尖底ぎみの丸底となるものと思われる。いずれの胎土にも1~4mmの砂礫を多く含む。色調は22が浅黄橙色(7.5YR8/3)、23が橙色(5YR7/6)である。これらの製塙土器は岩本正二氏分類のI a類、山内紀嗣氏のIII a、b類に相当する。24は須恵器杯蓋である。口径17.9cm。中央に扁平な宝珠形のつまみをもつものと思われる。天井部と口縁部との境界は段をなし、端部は下方へ短く屈曲する。内外面ともヨコナデである。色調は灰白色(N7/0)である。25、26は須恵器杯の高台部である。底径は25が11.1cm、26が9.1cmである。平坦な底部から斜め上にまっすぐのびる口縁部からなる。高台端面は25が内傾、26が外傾する。25の底部外面をヘラケズリする以外はヨコナデである。色調は25が灰色(N6/0)、26が青灰色(10BG6/1)である。

## 第11層出土遺物

27、28は土師器壺である。27は口径21.9cm。長胴形の体部から「く」字状に外反する口縁部をもつ。口縁端部は上方に拡張されている。端部は丸く収める。体部外面は縦方向の粗いハケ、内面は横方向のハケ、口縁部内面は横方向のハケ、外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)である。胎土には0.5mm以下の長石粒を多く含む。28は口径10.9cmである。球形に近い体部から短く「く」字形に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は丸く収める。口縁部はヨコナデ、体部内面は横方向のハケである。色調はにぶい橙色(5YR6/4)である。

## 第12層出土遺物

29は須恵器杯である。口径13.3cm、器高4.1cmである。平坦な底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部からなる。口縁端部は丸く収める。口縁部はヨコナデである。色調は灰白色(N8/0)である。

#### IV. まとめ

今回の調査では、13世紀後半かそれ以降と考えられる土坑、8～9世紀代と考えられる道路状遺構、足跡、溝、土坑を検出した。

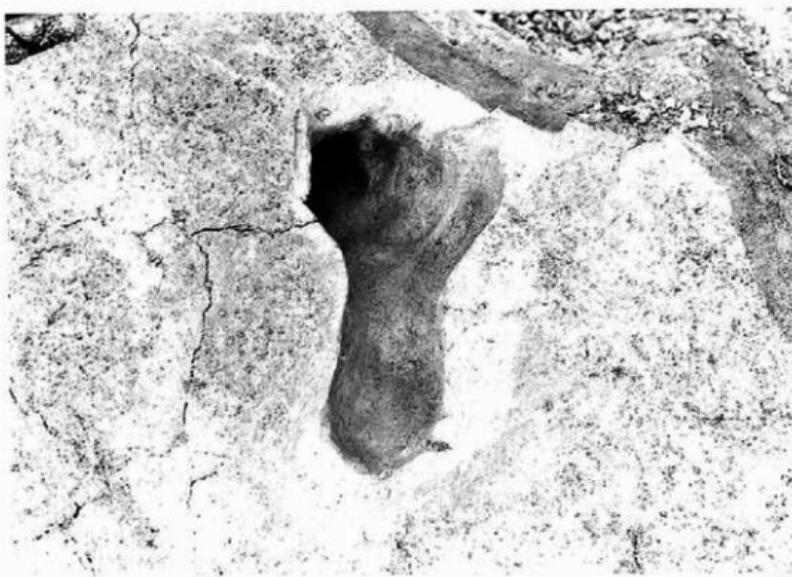
これまでの調査では、古墳時代後期、奈良時代～平安時代前半、鎌倉時代後半の須恵器、土師器、墨書き土器、縁軸土器、貨幣、瓦器、輸入陶磁器、土錠、瓦、獸骨などの遺物が出土している。しかし、これらの遺物はすべて二次堆積でありそれぞれの時代の純粋な包含層および遺構を検出することが出来なかった。今回の調査では遺物包含層が8層分、遺構面を4面（第5層、第9層、第10層、第11層の各上面）検出した。第8層より上は平安時代末～鎌倉時代後半のものである。第9層～第12層までは奈良時代～平安時代前半にかけてのものと考えられる。第9層上面の道路状遺構は、上面幅2.2～2.5m、下面幅2.8～2.9mで、道路状遺構の両側やや下がった所に第6層灰色粘土の堆積がみられる。この灰色粘土はほぼ水平に堆積し鉄、マンガン、植物の細かい根が網の目状に多く含んでいる。亀甲状のひび割れも見られることから水田の耕土であったものと思われる。のことから、水田の中を通る道であったと考えられる。道路状遺構の上面で足跡を1個検出した。この足跡は成人の右足部分で素足であったものと思われる。道路遺構については高槻市島上郡衙跡南部の西国街道に接近した地点で見つかっている。幅員11.5m（後に6m幅に改められている）、側溝を有し径10～20cmの川原石をつき固めた石敷の路面である。堺市から松原市にかけて広がる大和川・今池遺跡では、幅員18m、側溝幅1.2mの道路遺構が見つかっている。難波宮中軸線の真南への延長線にあたり時期は7世紀の中葉～後半と考えられている。松原市上田町2丁目では幅員10m、側溝幅1.7mの道路遺構が見つかっている。時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられている。これらの道路遺構は古代における中央の官都と地方とを結ぶ整備された交通路で官道あるいはそれに準じるものと思われる。西堤遺跡のものは整備された大きなものではないが、河内低地に広がっていた広大な水面「河内江」及びそれに注ぎ込む大和川の岸に沿う形であったと考えられる。この河内江は古代に朝廷の供御の魚鳥を貢進する「供御江」に指定され、やがてここから巨大な内膳司御尉所領河内大江御厨が生まれてくる。延喜5年（905）に設定された河内大江御厨は、河内国の「國中池河津」を御厨領としたものである。12世紀に入ると、中世荘園としての御厨の支配体制が整えられその集荷センターの一つが若江郡川俣にあったらしく、平岡神社社務職を相伝する藤原氏（水走氏）が大江御厨の執当職を掌握し、これをあしがかりとして河内郡水走の地を新たに開発して有福名水走開発田を本領とする開発領主に転身していく。御厨という地名が本遺跡の南東約50mに、川俣が北東70mにあり、今回出土した遺物も平安時代前半のものが多く、漁業関係の漁具としての網漁具（土錠）、製塩土器（大阪府泉南郡阪南町田山遺跡で出土している丸底3式に類似しており焼き塩専用の土器と考えられている）などがあり関連が考えられる。

岩本正二「7～9世紀の土器製造」「文化財論叢」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 1983年

山内紀彦「8、9世紀における内膳地域の製塩土器」天理大学学術研究145号 1985年



1 道路狀遺構



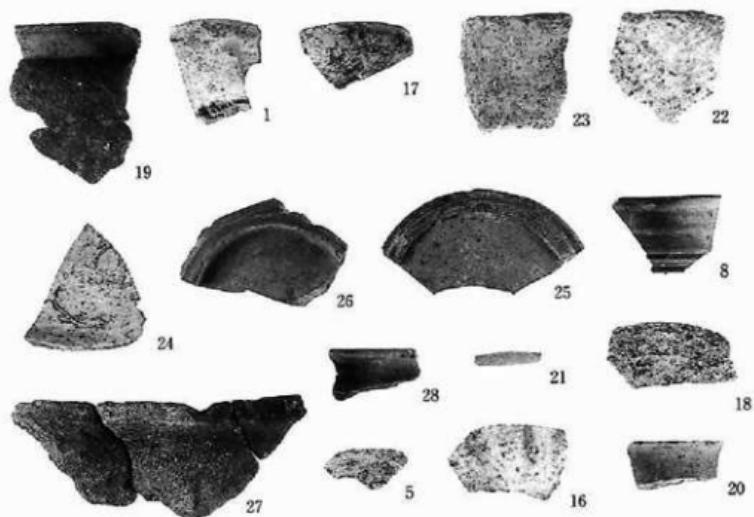
足跡



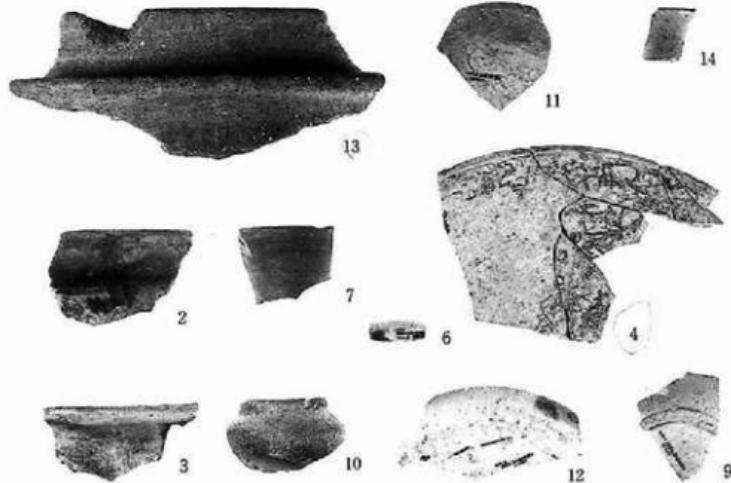
溝 2



土坑 2



土師器・須恵器・土鍋・製塙土器



土師器・須恵器・土鍋

# 報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいはくつちょうさかいほうしゅう
書名	埋蔵文化財発掘調査概報集
調査名	1. 鬼塚遺跡第12次発掘調査概報 2. 若江遺跡第1次発掘調査概報 3. 西堤遺跡第4次発掘調査概報
調査者名	1. 学本盛裕 2. 下村晴文 3. 勝田邦夫
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21 TEL06-6736-0346
発行年月日	平成11年2月1日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	地番番号					
鬼塚遺跡 (第12次調査)	東大阪市福殿町8-25	27227				19900409 19900423	60	浄化槽建設
若江遺跡 (第1次調査)	東大阪市若江南町2丁目9-60	27227				19721201 19730331	420	小学校校舎増築
西堤遺跡 (第4次調査)	東大阪市西堤学園町2丁目	27227				19791022 19791110	130	小学校校舎増築

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鬼塚遺跡 (第12次調査)	集落	弥生時代～古墳時代初期	壹棺・墓穴住居	弥生土器・庄内式土器	
若江遺跡 (第1次調査)	城跡 寺跡	13世紀～15世紀	建物跡・井戸溝・土坑	瓦・瓦器・陶器 土師器・砾石	
西堤遺跡 (第4次調査)	集落	8～9世紀 13世紀	道路状遺構 土坑・溝	須恵器・土師器 瓦器・陶磁器	

埋蔵文化財発掘調査概報集  
-1998年度-

1999年2月1日

発行 財團法人 東大阪市文化財協会  
印刷 株近畿印刷センター

